

Research on
the War Remains
in Hamamatsu

静岡大学
公開講座
ブックレット2

浜松の戦争遺跡を 探る

荒川章二+村瀬隆彦+竹内康人

静岡大学生涯学習教育研究センター(編)

静岡大学生涯学習教育研究センター

浜松の戦争遺跡を探る

静岡大学生涯学習教育研究センター（編）

第1回 浜松の陸軍基地

荒川 章二 3

「浜松の戦争史」と私／浜松歩兵第六十七連隊
／高射砲第一連隊と陸軍飛行第七連隊／軍都・
浜松への変貌

第2回 浜松空襲について

村瀬 隆彦 25

研究の流れ／藤枝防空監視哨の記録／B 29・
M 69開発の流れ／日本空襲の流れ／おわりに

第3回 浜松の戦争遺跡

竹内 康人 53

戦争遺跡の定義／戦争の歴史と浜松／浜松の
戦争遺跡／写真で見る浜松の戦争遺跡／世界
各地の戦争遺跡／戦争遺跡の意義

本書は、静岡大学生涯学習教育研究センターの主催により、以下の要領により行われた公開講座「浜松の戦争遺跡を探る」の講演録である。

・日時：（第1回）2008年10月4日（土）、（第2回）10月11日（土）、（第3回）10月18日（土）
14:00～16:00

※第4回を10月25日（土）に実施したが、野外見学のため本書には掲載していない。

・会場：静岡大学浜松キャンパス

浜松の陸軍基地

荒川章二

「浜松の戦争史」と私

私は、二〇年ほど前に静岡大学にやってきました。浜松ではなく、静岡市のキャンパスで仕事を始めましたが、その時に、この公開講座でも講師をされる竹内先生が、戦争遺跡によって戦争史を語るといふ本を作れないかと投げかけてきて、お手伝いすることになりました。その会は、「静岡県近代史研究会」といいますが、私はその事務局長を務めることにもなったため、出版社を探して本をまとめる役目を担うことになり、こうしてできたのが『史跡が語る静岡の十五年戦争』という本です。一九九四年のことです。

この本が出てから、各県で戦争遺跡のガイドブックが発行されました。戦争の痕跡を示す遺跡の写真を載せて、概要を記した上でそこへの行き方を紹介するという基本形は、

どこも踏襲しています。最近では、県レベルではなく、もっと細かい地域レベルでも行われています。竹内先生は、その後も引き続き精密な調査を続けています。

私自身が初めて本格的に静岡の軍事史に取り組んだのは、『静岡県史』でした。私はもともと政治史が専門で、軍事史とは何の関係もなかったのですが、軍事史もできるだろうということと軍事史の担当にさせられました。『静岡県史』では専ら軍事史と政治史を担当し、資料編四冊、通史編二冊の計六冊に関わっています。『静岡県史』に関しては、戦前の軍事史について私がほとんど担当しています。敗戦間際については次回の講師である村瀬先生にお願いしました。『静岡県史』をベースにして、近隣の豊橋の軍隊の動きや富士の演習場の問題なども総合して、静岡県という地域から軍隊あるいは軍事史がどのように見えるのかという視点

でまとめたのが、『軍隊と地域』という本です。

最近関心を持っているのが「浜松まつり」です。近くの方はご存じだと思いますが、かつて浜松まつりの時に和地山公園で凧あげをしていましたね。和地山公園は、戦前は練兵場でした。歩兵第六十七連隊の練兵場を借りて、凧あげ祭りをしていたわけです。当時は浜松まつりという名前はありませんでしたが、和地山の会場でおこなっていた凧あげが、その後、浜松まつりへと変わっていくのです。浜松まつりという名前が出るのは戦後のことです。いずれにしても、浜松まつりの凧あげは軍隊と非常に深い縁を持っています。

浜松の戦争史とは、このようなところで接点があるという事になります。

今日は、明治から一九四〇年（昭和一五）くらいまでの地図を見ながら、浜松の軍事施設の拡大と変化について、改めて地図で視覚的に確認してみようと思います。

↑第二次大戦生活史の発掘

最近、近現代の戦争遺跡の保存・活用に関する関心が高まり、県単位での戦争遺跡ガイドブックや、考古学的方法（戦跡考古学）による調査報告が刊行されるようになっていきます。

戦争遺跡というと、広島の実験ドームや長野県の松代大本営の地下壕が有名です。また、沖縄の南風原町の陸軍病院壕は、二〇〇七年から公開されて実際の壕に入れるようになりました。南風原町は、那覇の南東方向にあります。ここには陸軍病院が大規模に作られていました。有名なひめゆり部隊をはじめとする女学生の手配部隊の最初の配属地になったところです。壕の中は非常に暗い状態で、懐中電灯を持って入ります。

このような有名な戦争遺跡がありますが、それだけでなく、日本の中にはどの市町村にもいろいろな戦争関係の構造物や遺構があります。このような近代の戦争、特に第二次大戦期を考える手がかりは、比較的身近に残されているため、そこから多くのことを知ることができます。

たとえば、自治体史や町内会ごとの地域史などを仔細に見ていくと、戦争の話が多く出てきます。そのようなものも参考になります。戦争遺跡のガイドブックなどであたりをつけて、地図を片手に遺跡が残る現地に実際に足を運んでもいいでしょう。現地で地元住民の話を聞くと、貴重な証言を得られることもあります。現地を確認した後、研究論文や『戦史叢書』、関係部隊史などに当たってより深く調べたり、かつての写真や地形図で当時の状況を確認したりすれば、戦争遺跡は確たる歴史の証言者に生まれ変わります。

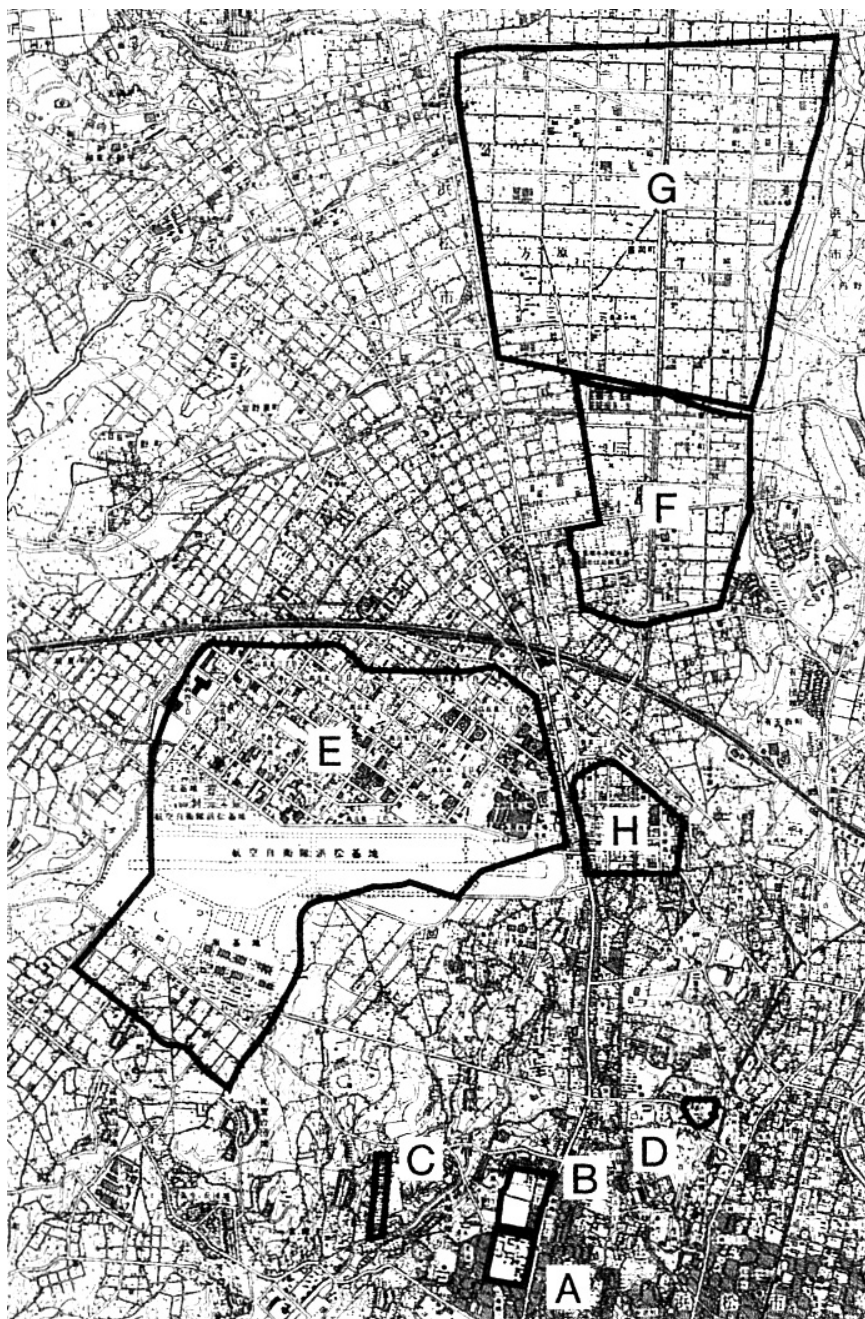


図1 戦争遺跡地図／荒川章二「第二次大戦生活史の発掘―地域の戦争遺跡を探る」より

戦争の時代が臨場感を持って迫ってくるだろうと思います。

浜松歩兵第六十七連隊

↑浜松の軍事施設の誕生

一九〇七年（明治四〇）、静岡大学浜松キャンパスがある場所には、歩兵第六十七連隊の兵営と練兵場が誕生しています。これは浜松地域に最初にできた本格的な軍事施設です。一九〇七年は、日露戦争の後になります。日本の軍事拡大は、まず日清戦争準備で進んでいき、日清戦争が終わった後、日露戦争の対策として次の軍拡が始まります。そして日露戦争時に軍隊が大きくなり、それを定着させる形で日露戦後にさらに軍事拡大が進んでいきます。歩兵第六十七連隊ができたのは、まさにちょうどこの時期にあたります。

ちなみに静岡の歩兵第三十四連隊の場合は、日清戦争後にできています。日清戦争の後にできた歩兵連隊は第四十八連隊までですから、第四十九連隊以降が日露戦争後にできたことになります。そのような形で、当時の浜松町に本格的な軍事施設が誕生したということになります。

ただし、それまでに浜松に軍隊がいなかったわけではなく、軍隊の演習場として使われることもありました。しか

し、浜松の町中あるいは近隣に部隊ができたのは、歩兵第六十七連隊が最初ということになります。

↑浜松の戦争遺跡の概観

図1は、現在の浜松市の地図です。静岡大学浜松キャンパスはAの場所です。高射砲連隊時代の砲廠が、工作技術センターとして現在も利用されています。Bに歩兵連隊の練兵場がありました。現在は和地山公園になっています。Cには実弾射撃場があり、Dには陸軍墓地がありました。Eの中央部には飛行第七連隊の飛行場、西側に爆撃演習場が設置され（「浜松陸軍飛行場」と総称）、現在は航空自衛隊浜松基地になっています。浜松陸軍飛行場の南端部には浜松陸軍飛行学校が設置され、重爆撃の専門教育と航空戦術研究が行われました。

日中戦争が始まった頃から、新たな爆撃場や飛行関係の軍事施設が北に向かって広がっていきます。浜松陸軍飛行場の北東部は三方原村でしたが、村の大部分が三方原飛行場として使用され、Fが部隊所在地と飛行場、Gが爆撃場となりました。Hには第一航測連隊（通称「中部一三〇部隊」）という、機位を失った航空機誘導の専門部隊がありました。G、F、Hが、日中戦争以降拡大する施設で、今回の話はこのあたりのことになります。

↑進出する軍事施設

「遠江国敷知郡浜松町全図」(図2)は一八九五年(明治二八)の地図ですから、日清戦争の終わった年です。軍隊がまだない時代の地図になります。この時期の町場は非常に狭く、少し外に出ると、畑が広がるという状況です。浜松城の周りにも何もありません。浜松城の北側に家もないという状態になります。このような所だったからこそ、軍事施設が作れたわけです。

同じような時期の地図をもう少し絵図的に示してあるのが「浜松鉄城閣及市街略図」(図3)です。一八九九年(明治三二)ですから、浜松の停車場ができたばかりの頃ですが、周りにはまだほとんど何もないことが分かります。

図4は、浜松市の人口の推移を示したグラフです。このグラフを見ると、第一次世界大戦が終わったところから急激に人口が増えていることが分かりますが、実は浜松の特徴は、それよりも前から伸びているということです。たとえば沼津市では、人口が増えだすのは大正時代に入ったところくらいからで、それまでは幕末からほとんど動きがありません。静岡市でもそれほど動きは大きくないと思います。ところが浜松の場合は、大正時代よりも前から人口が増え始めているのです。

それだけ浜松は、織物業を中心として活気があったとい

うことですが、浜松はさらにまちを活性化させるため現在のJ・R浜松工場などの工場を誘致します。工場ができると、大量の労働者がやってきて、多額の予算が投資されるからです。軍隊の誘致もこれと似たところがあります。

↑軍隊の誘致

軍隊はかつてにやって来るのではなく、陸軍などはどこに連隊を作るか事前に調べます。ただしそれだけで決めるのではなく、地元の市や町がどのくらい誘致に熱心か、ということが重要になります。その場合の熱心さとは、お金を出すこと、あるいは土地を出すことです。

たとえば軍隊を誘致する時に、浜松と静岡と沼津が手を挙げたとします。それぞれの自治体がお金と土地を用意します。「うちの市はこれだけ用意するから来てくれないか」という交渉をして、軍隊の誘致合戦をします。もちろん陸軍はそれだけで決めるほど単純ではないので、もっと軍事的な必要性を考えながら進出をしていくわけですが、浜松市では、まちの活性化という戦略の一つとして、工場と軍隊の誘致に積極的に関わっていたという側面があります。

つまり、町場の人は軍隊を誘致したいわけです。ところが、訓練場になって被害に遭うことが懸念されるような地域の人々は当然反対します。そのような利害関係の対立がある



図2 遠江国敷知郡浜松町全図（1895年）／『浜松市史 新編史料編二』より

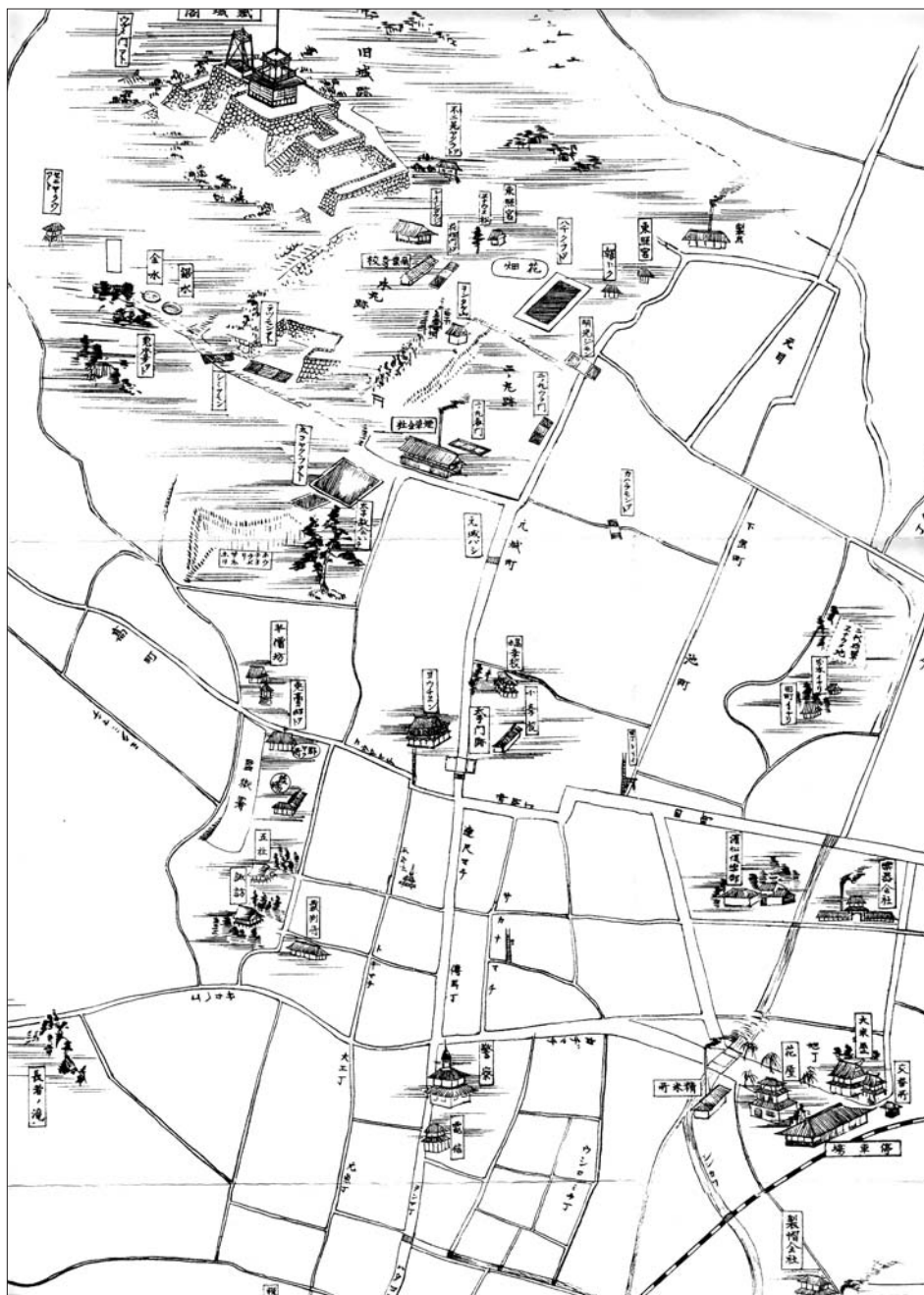


図3 浜松鉄城閣及市街略図（1899年）／『浜松市史 新編史料編二』より

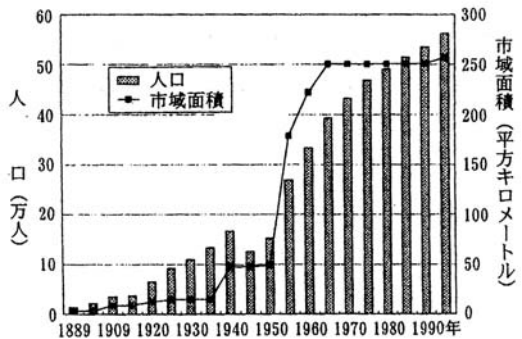


図4 浜松人口グラフ／『中部』 地図で読む百年』より

くさんの土産を買います。このようにして入営・退営という儀式が繰り返されていくのです。

一九三〇年（昭和五）の段階で見ると、浜松には二〇〇〇人、三〇〇〇人という人が、この入営・退営の時期に出入りをしています。この時期には、非常に大きな賑わいとなり、土産物屋やその他の商店が潤うことになりました。そのため、軍隊の誘致に積極的になるわけです。

のですが、町場の人が誘致をする一つの要因は、まちに賑わいが出てくるからです。

軍隊があれば、毎年そこに兵隊が入営します。単に入営する人だけでなく、家族や見送りの人たちも来ます。何千人という人が浜松に入ってくるのです。逆に退営して浜松から出ていく人たちは、た

陸軍墓地

一九一一年（明治四四）の地形図では、歩兵営、練兵場、射撃場、陸軍墓地という軍の施設が見えます（図5）。歩兵第六十七連隊が来て歩兵営ができると、すぐにできるのが練兵場です。歩兵営と同じくらいの規模の練兵場が必要になります。現在の和地山公園の二倍ぐらいの広さの練兵場です。そして必ず射撃場を作ります。どこの連隊でも必ず射撃場を作り、墓地も作ります。

この墓地には、兵営で勤務している最中に亡くなられた方と、出征して亡くなられた方の両方が葬られます。その後、曖昧になるのですが、基本的に軍人が戦死した場合、陸軍墓地に葬られるのが原則です。将校は自分の家に葬ることが許されるのですが、一般の兵卒は軍人墓地に葬られます。しかし、家族は当然自分の家のお墓に入りたいわけです。その場合は分骨をするか、あるいは兵士の残されたものを少し分けてもらってお墓を作ることになります。ただし、それはだんだん崩れていきます。お骨自体が帰って来なくなるからです。

日露戦争の途中くらいまでは一生懸命骨を拾います。ところが、日露戦争でも後半になると、死者がたくさん出てきてお骨を集めきれなくなり、かつ戦争が終わった時に持って来られないという事態が生じます。そうすると、太平洋

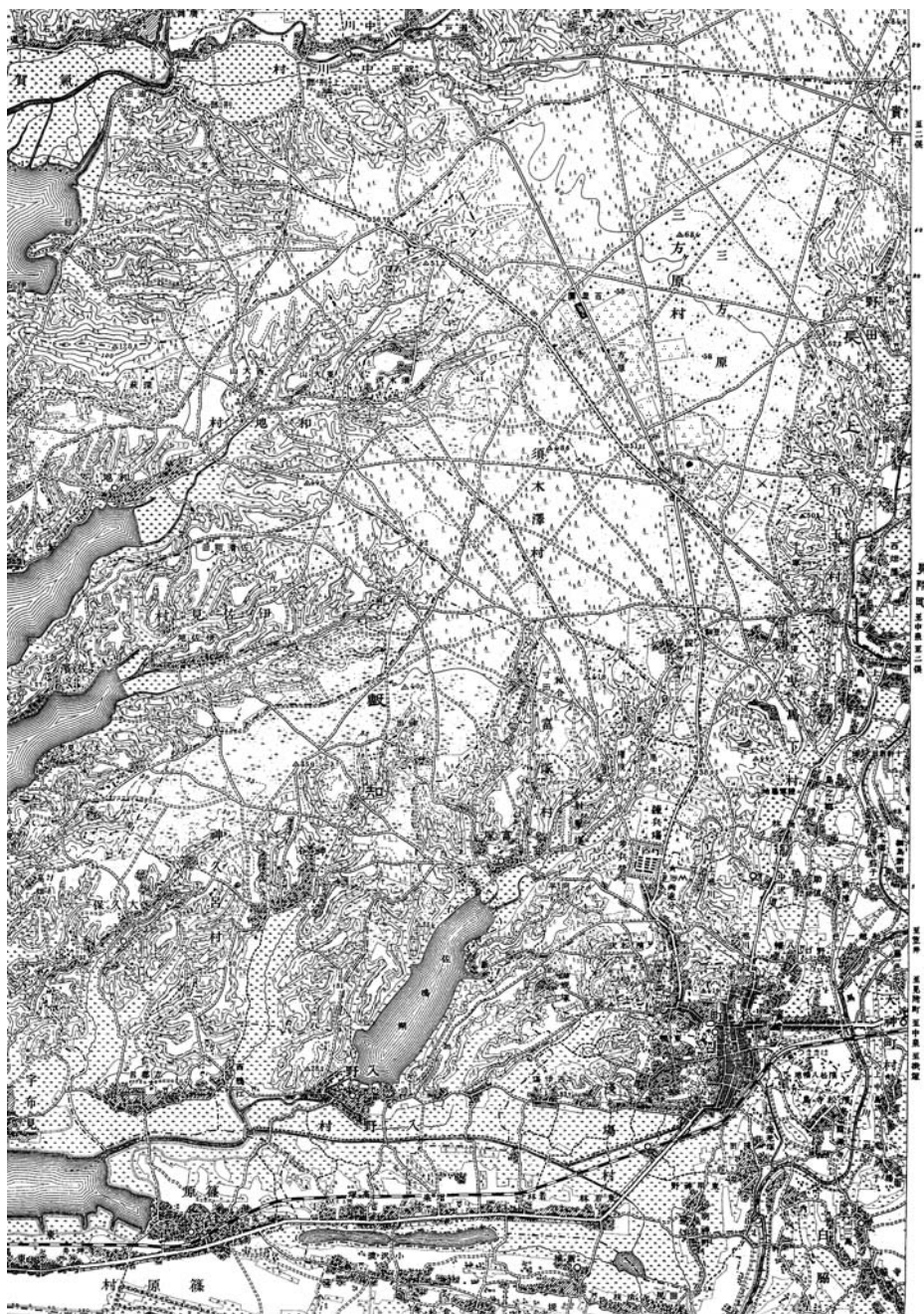


図5 明治四十四年地形図／『浜松市史 新編史料編 三』より

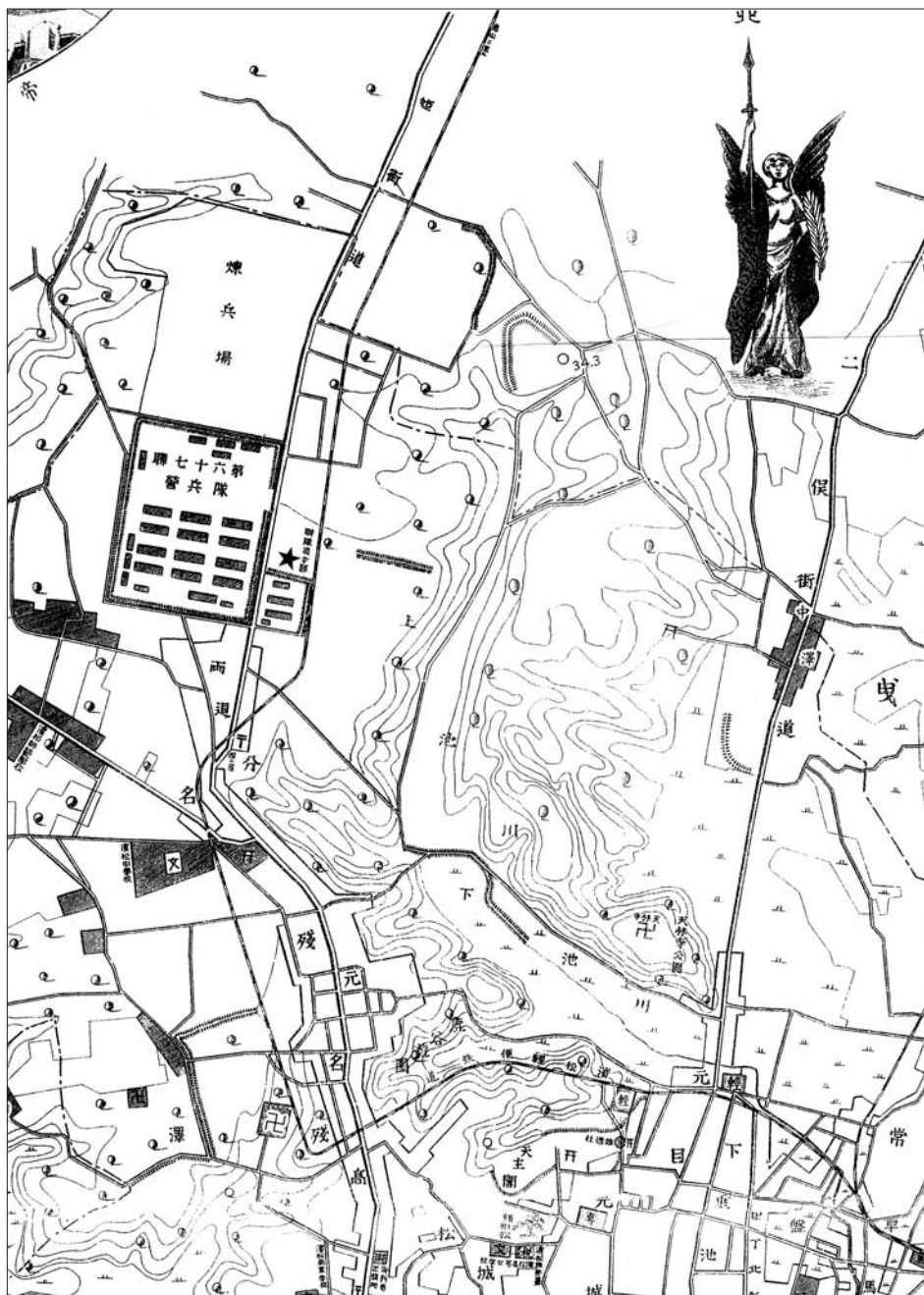


図6 浜松市全図（1918年）／『浜松市史 新編史料編三』より

戦争でもありました。焼いた骨を持って帰れないので遺髪や爪などを持ってくるようになります。なお、日清戦争の時には、軍人の骨は焼かないで土葬状態です。火葬が許されるのは、日清戦争の最後くらいからです。

十歩兵第六十七連隊の施設

図6の浜松市全図（一九一八年）では、歩兵第六十七連隊の兵舎が並んで建っているのがよく分かります。現在の静岡大学浜松キャンパスの正門とほぼ同じ場所に門があったはず。その東側に「連隊司令部」と書いてありますが、正確には「連隊区司令部」です。ここでは、徴兵制に関わる軍隊の役所のような施設です。歩兵連隊ができると、必ず連隊区司令部ができます。

その南側にあるのは「衛戍病院」、つまり軍人用の病院だと思えます。その東側には線路が通っているのが分かります。これは浜松鉄道（後の遠州鉄道奥山線、一九六四年廃止）です。

図7は歩兵第六十七連隊の正門です。五人ずつ並んで歩いています。人が五人並んで通れるだけの幅があったということになります。静岡大学浜松キャンパスには、和地山公園側にこの絵のような煉瓦造りの門が残っています。建物が奥の方に見え、おそらく左側に兵舎が並んでいたの

ではないかと思えます。

図8の写真では、左側に兵舎が見えます。土塁のようなもので囲んでいることが分かります。右側は衛戍病院です。衛戍病院は道を隔てていますから、中央の道が姫街道ということになります。おそらく浜松キャンパスの敷地の南側のあたりの場所の写真だと思えます。

図9は浜松鉄道のガイドマップのようなものですが、省線の浜松駅よりも離れたところに駅があることが分かります。連隊前駅の手前には兵営の絵があります。飛行連隊はまだできていないようです。



図7 歩兵第67連隊正門／『浜松市史 新編史料編三』より



図8 歩兵67連隊と衛戍病院／『浜松市史 新編史料編三』より

高射砲第一連隊と陸軍飛行第七連隊

図10は、大正初期の浜名郡各村の全面積に対する田および畑の百分率を示した地図です。たとえば、中央にある天王村では、村の全面積に対して田んぼが五九%、畑が二九%ですから、ほとんど開発された土地であることが分かります。

ところが、飛行連隊が進出する三方原村では、田んぼは〇%、畑は九%ですから、開発された土地が非常に少ないわけです。そのような地域に連隊が進出していくということになります。

十高射砲第一連隊の誘致

図11の絵（「浜松市を中心とする名所史蹟交通鳥瞰図」）は昭和初期のもですが、明治の中期に比べると、街がはるかに賑やかになっているようすが分かると思います。浜松城址付近までかなり広がりを見せている状態が分かります。この地図では、歩兵連隊が高射砲連隊と飛行連隊に変わっています。

一九二五年（大正一四）に大きな軍縮がありました。歩兵連隊の場合、いくつかの連隊が消えます。歩兵第六十七連隊もそのうちの一つです。四個師団ですから、一六の歩

兵連隊がスクラップになり、その一つとして、浜松の連隊が消えたわけです。

ところが、浜松の連隊がすべてなくなるのは地域にとって困るという要望が出ました。特にその要望を強く出したのが、在郷軍人会でした。そのような要望があり、豊橋にある歩兵第十八連隊という古い連隊の三つの大隊のうちの一つを浜松に派遣駐屯してくれないかという要請を出し、それが受け入れられました。ただし連隊とはだいたい二〇〇〇人弱で

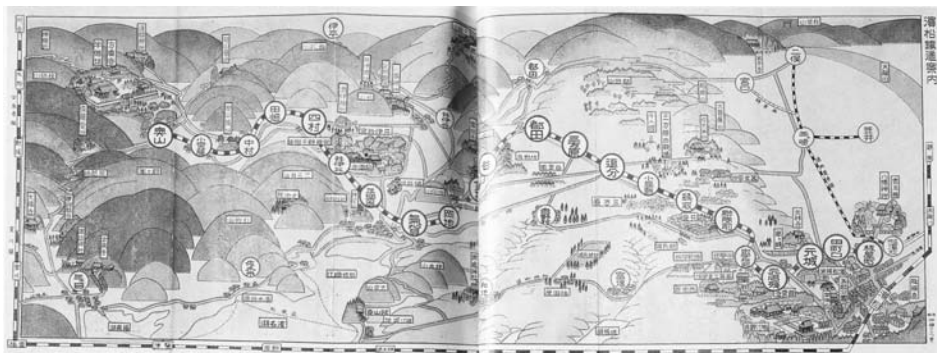


図9 浜松鉄道案内／『浜松市史 新編史料編三』より

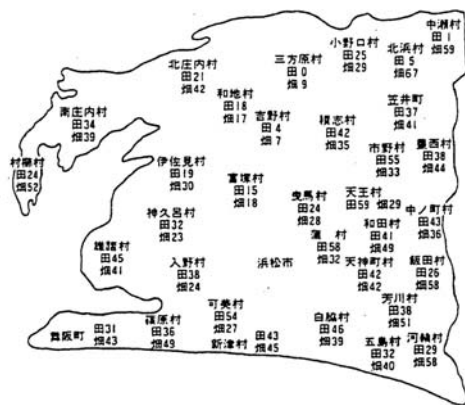


図10 町村面積に対する田畑比率（大正初期）／『浜松市史三巻』より

す。その時期で一八〇〇人くらいだと思えます。そのうちの三分の一ですから、ぐっと減ります。いずれにしても、この静岡大学浜松キャンパスは兵営として残るわけです。

高射砲連隊は豊橋にできたのですが、それを浜松に引っ張ってきます。これはすさまじい荒業なのですが、なぜ成功したかというと、豊橋でもめたからです。高射砲連隊が活動するには、砲撃ができるスペースが必要です。これ以上、大砲でドンパチやられたのでは、われわれの農業ができません。ということで、農民たちの反対が起こったのです。

渥美半島は農業的にもかなり有望なところですが、今でも非常に豊かな農産物に恵まれています。当時も農業で十分にやっていけたので、別に軍隊がなくてもよかったわけです。そのために、非常に強い反対運動が起こりました。

その結果、実弾を撃つという演習ができなくなりました。ちょうどそのような時に、浜松側から移ってほしいという要請が来るわけです。浜松では砲撃演習場を米津浜に計画します。すると今度は米津浜の漁民が反対しますが、補償金を積んで交渉し、結局、米津浜を砲撃演習場として確保するという条件で、一九二八年（昭和三）、高射砲第一連隊が浜松に来ることになったのです。

↑高射砲第一連隊の施設

高射砲第一連隊の兵営は、それまで歩兵営だった静大浜松キャンパスです。高射砲連隊時代の砲廠は、現在でも工作技術センターとして利用されています。キャンパスの北



図11 浜松市を中心とする名所史蹟交通鳥瞰図（昭和初期）／『浜松市史 新編史料編四』より

東部の角には、ひときわ高い土塁があります。おそらく弾薬庫です。練兵場の大部分は、現在、和地山公園として利用されています。公園の中を気をつけて見ていくと、一九三〇年（昭和五）の昭和天皇行幸時の親閲記念碑があります。

射撃場西側すぐの川沿いには、一九三三年（昭和八）建立の記念碑があります。碑文によれば、飛行連隊設置に伴ってこの地域の北側二キロメートルから三キロメートル以北の竹木が伐採されたために河川が氾濫し、水田被害は五〇余町歩に及び、そのため陸軍に河川改修の陳情を行い一九三一年（昭和六）に完成したそうです。

高射砲連隊には、毎年六〇〇人くらいが入隊してきました。飛行連隊は二〇〇人台です。そうすると、歩兵連隊一個分です。ですから、飛行連隊と高射砲連隊を合わせると、歩兵連隊と同じくらいの人数が、毎年入って来るということになります。

↑飛行第七連隊

その飛行連隊とは、一九二六年開設の飛行第七連隊で、日本陸軍初の重爆撃専門部隊でした。現在の航空自衛隊浜松基地を含む、六五五ヘクタールが飛行連隊の敷地になります。自衛隊基地には、「陸軍爆撃隊発祥之地」とい

う碑があり、連隊の由来が刻まれています（図12）。この連隊は、一九三七年七月、日中戦争に対応して三つの部隊を編成し



図12 陸軍爆撃隊発祥之地の碑

て中国に派遣し、その一つ飛行第六大隊（後に飛行第六十戦隊と改称）は、海軍航空部隊と協力して、一九三八年から一九四一年まで、重慶爆撃を実施しました。世界で最も早い戦略爆撃の一つということになります。

飛行第七連隊本隊（後に飛行第七戦隊と改称）は、一九四一年、関東軍特殊演習に参加し、その後インドネシアやニューギニアに派遣され、一九四五年には沖繩戦で雷撃（魚雷）攻撃や特攻作戦（義烈空挺隊）を実施します。

浜松陸軍飛行場の南端部には、一九三三年、浜松陸軍飛行学校が設置されて、重爆撃の専門教育と航空戦術研究を担いました。同校は、一九四四年六月、実戦部隊である浜松教導飛行師団に改編されて、サイパン島攻撃の実施をしています。また、陸軍最初の特別攻撃隊である富岳特別攻撃隊の母体にもなって、フィリピンで特攻作戦を展開しま

した。

飛行連隊は、パイロットだけの部隊ではありません。ほとんども地上勤務兵で、飛行機工事、発動機工事、鍛冶工事、電気工事、無線電信工事、写真工事、気象観測工事などとして配属されました。飛行機に搭乗できたのは下士官と将校だけです。浜松の飛行連隊には三〇〇人弱の兵隊が来るのですが、そのうち飛行機乗りは、入営する兵士の中にはいなくて、将校たちが別途訓練されてここで整備された飛行機に乗るとい形になります。

飛行連隊では、夜間爆撃と長距離爆撃、そして寒冷地へ飛ぶ訓練が重点的に行われていました。寒冷地への飛行は、対ソ連戦が念頭にあったからだと思います。また、海上を飛ぶ訓練も行っています。現在のようにリーダーが発達した時代と違って、たとえば台湾や小笠原、沖縄へ飛ぶというのは難しかったようです。浜松から飛び立って、正確に海の上を飛んで目標地に達するという訓練を何度もやっています。

＋地図・写真で見る高射砲第一連隊・飛行第七連隊

このあたりの時期を、地図で確認してみましょう。図13では、練兵場があり、その南側は高射砲第一連隊に変わっていることが分かります。気がついた方がいるかもしれません。

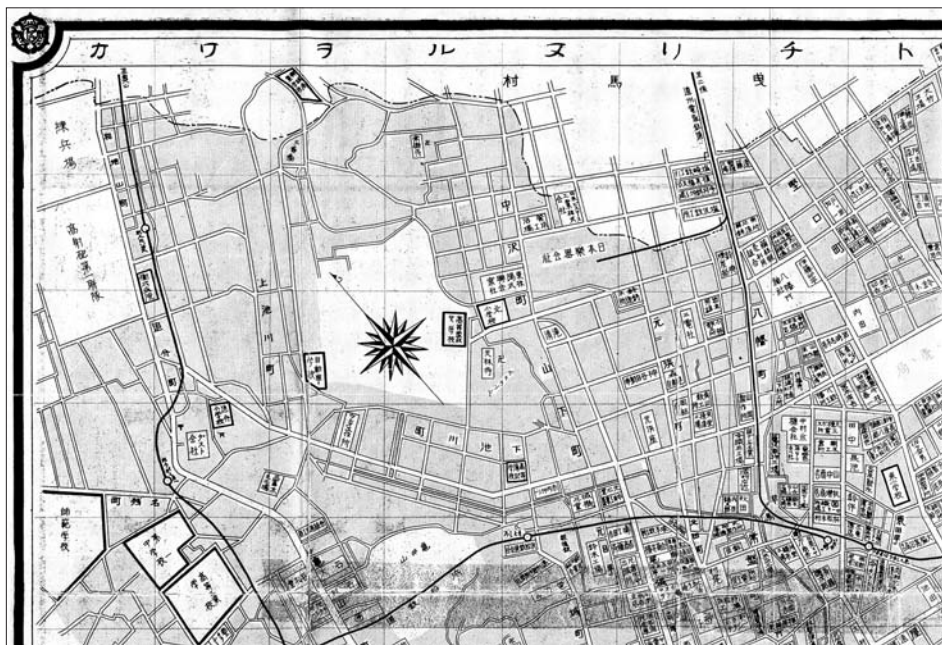


図13 大日本職業別明細図(1934年)／『浜松市史 新編史料編四』より

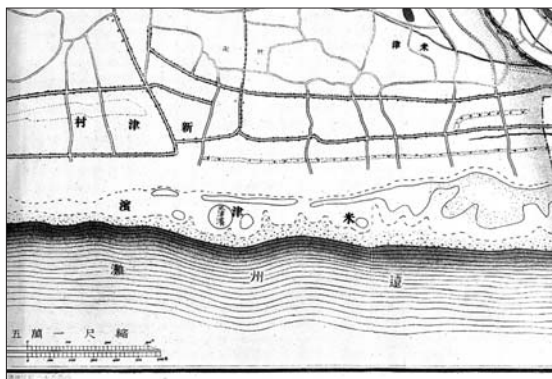


図14 浜松市全図（1939年）／『浜松市史 新編史料編四』より

せんが、この地図からは連隊司令部が消えています。徴兵事務をやるのは歩兵連隊がやるので、高射砲連隊の場合は連隊司令部はいらないのです。ですから、衛戍病院だけが残っています。

図14は、高射砲部隊が演習する砲撃場のある米津浜

です。この海岸から海に向けて撃っていたわけです。この演習は、飛行連隊と一緒にしています。もちろん模擬弾でしょうが、高射砲連隊が飛行連隊の飛行機に向けて打つのです。飛行連隊と高射砲連隊がセットになっているのが非常に都合がいいのです。だから、飛行連隊をここに作るのだったら高射砲連隊もよこせというのが、浜松側の言い分だったわけです。

図15は高射砲連隊練兵場の写真で、大正末期のもので

すが、この地図から見えます。この写真を見ると、練兵場の雰囲気分かりますが、かなり広大な場所です。だから風あげには最適だったのですが、陸軍と交渉して五月初めに三日間ほど開放されて、この写真のように風あげをして市民が楽しむということが行われていました。陸軍側にとっては、軍を支持してもらうための非常によい仕掛けになっています。

図16は高射砲連隊の営門です。図7と比較すると分かりますが、歩兵連隊時代とは門柱が違っています。おそらく上を塗り固めたのではないと思



図16 高射砲連隊営門／『戦乱のさなかに』より



図15 高射砲連隊練兵場写真（大正末）

います。図17は米津海岸での射撃演習の写真で、一九三五年（昭和一〇）のもので、奥に見えるのは砂丘だと思いが、砂丘の向こう側に海岸があります。おそらく砂丘の手前側から、砂丘を越えて海岸側に向けて砲撃演習をしている風景だと思います。

図18は、照空灯と聴音機の写真です。左側は照空灯で、夜間、上空を飛ぶ敵の飛行機を探し出すための照明灯のことで、右側が聴音機で、敵機の爆音を聴いて機種、高さ、速度を推定するための機械です。聴音機や照空灯を操作する部隊を照空隊と呼びました。



図17 米津海岸射撃演習／『戦乱のさなかに』より



図18 照空灯と聴音機／『戦乱のさなかに』より

図19は、豊橋の高師原陸軍演習場の写真です。

これは浜松の写真ではないのですが、もともと高射砲連隊があった場所、ここから追い出されたわけです。現在の愛知大学がある場所が高師原で、ここには師団があったのですが、先ほど言った軍縮で師団が消えます。しかしその後も演習場は残ります。これは一九三五年（昭和一〇）の写真ですから、この時期には演習が可能になって、非常に広大な演習場になり、浜松の部隊も使用しました。

十浜松基地のかつての姿

ここからお見せするのは、航空自衛隊浜松基地がもともとどのようなところだったのか、そのようすが移された写真です。図20は県有林の写真ですが、このような林野でした。もともとは宮内省が持っていました、その後、静岡県に払い下げます。県に払い下げたのに、陸軍が引き渡せと言い、



図19 高師原陸軍演習場／『戦乱のさなかに』より

県はOKを出すという
経緯がありました。

先ほど図10で見まし
たが、たとえば三方原
村の場合は、畑が開墾
されたのが九%で、田
んぼが〇%、つまり全
体の一割しか開墾され
ていない状態でした。
それは実際には図21の
ような景観でした。こ
のような状態だったた
めに、軍が「われわれ
によこしてもいいでは
ないか」という要求を
してきたわけです。

図22は飛行場ができ
た頃の姫街道です。明
治末期の状況とはあま
り変わっていません。
この写真は正統の終わ
りくらいのものです



図21 県有林／『浜松市史 新編史料編四』より

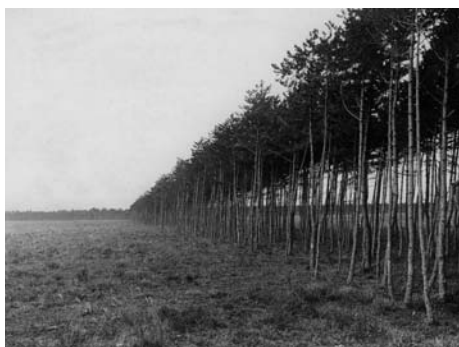


図20 県有林／『浜松市史 新編史料編四』より



図23 浜松鉄道／『浜松市史 新編史料編四』より



図22 姫街道／『浜松市史 新編史料編四』より



図25 爆撃場／『浜松市史 新編史料編 四』より



図24 追分と飛行連隊／『浜松市史 新編史料編四』より

図24は、追分のあたりです。姫街道がくの字型に曲がっているのが分かります。右側の奥に建物が連なっています。これは飛行連隊の隊舎ではないかと思えます。図25は三方原にできた爆撃場を描いた絵です。手前の鉄道は浜松鉄道です。すぐ近くで爆撃の演習をしているわけですから、事故がない方が不思議なほどの距離でやっているのが分かります。

図26はかなり珍しいと思うのですが、飛行連隊の図面です。燃料庫、地下タンクが書き込まれてあり、右側には兵舎が並んでいます。材料廠や将校の集会場もあります。弾薬庫は左上の方に見えます。また、右下にはプールがあります。飛行連隊は待遇が違ったのかとも思います。ここでおもしろいのは航空神社です。昭和になると、各部隊に神社を作ります。船であれば、船内に艇内神社といわれる祭壇場を作ります。この図面でも航空神社が確認できます。

図27もかなり珍しい地図です。日中戦争後くらいこの時期のものだと思いますが、この地図には、「爆撃目標」という文字と記号が書き込まれています。「監的」という名前もいくつか見えますが、これは爆弾の観測をする棟がある所

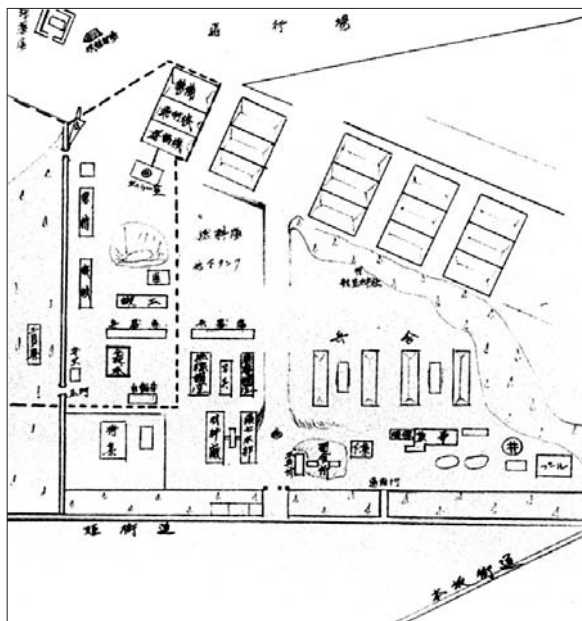


図26 飛行連隊図面／『浜松市史 新編史料編四』より

です。このような施設は普通の地図には書かないのですが、それが書き込まれている地図です。何か特別な要請があつて作られた地図が発見されたということだろうと思います。図28も同じ地図ですが、米津浜のところに「飛校高砲射撃場」と書いてあります。おそらく飛行学校と高射砲部隊の共同の射撃場がここにあつたということだと思います。

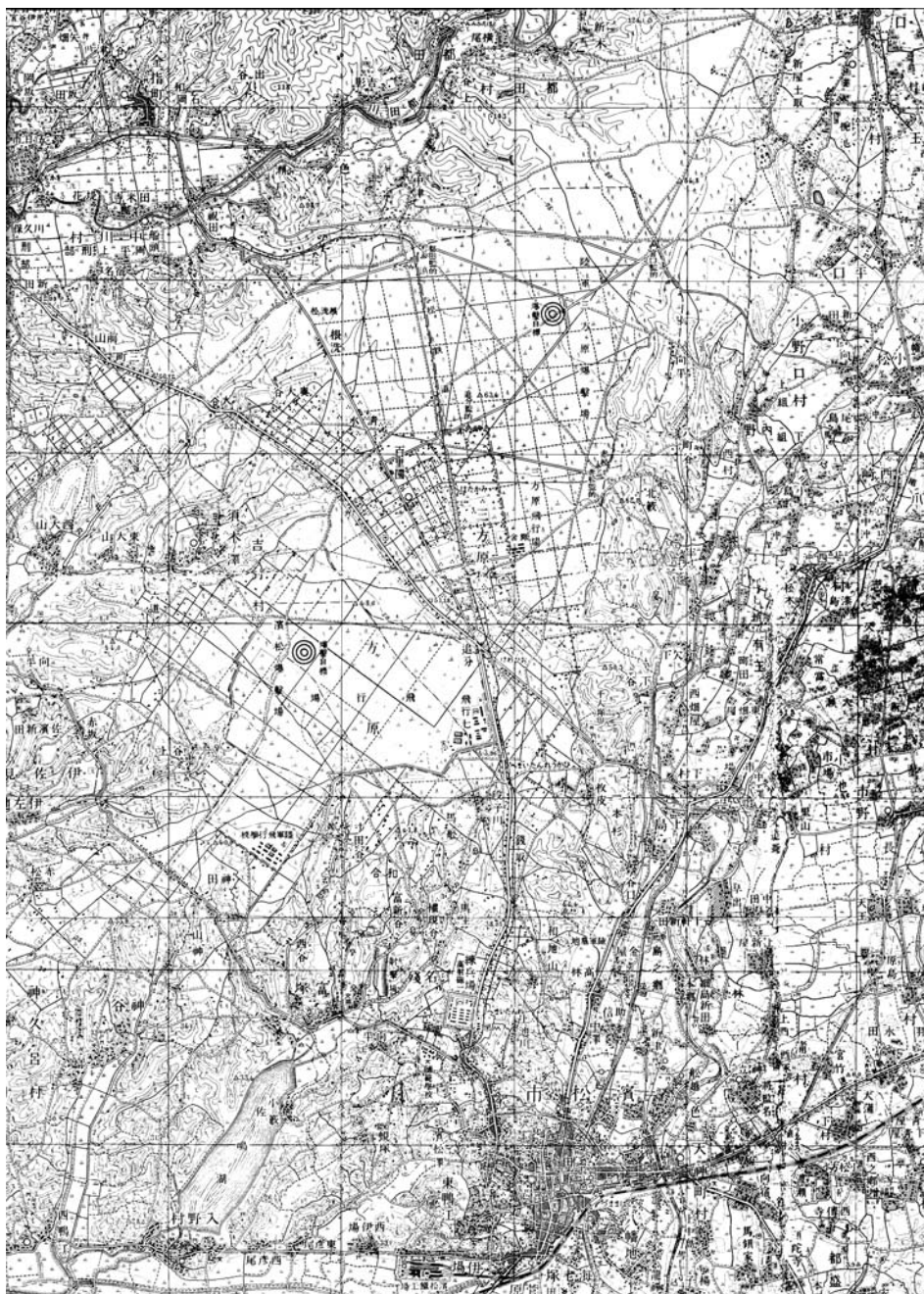


図27 軍事施設入地形図／『浜松市史 新編史料編四』より



図28 軍事施設入地形図／『浜松市史 新編史料編四』より

軍都・浜松への変貌

一九二五年から一九二八年にかけて、浜松市は日本陸軍の現代化を象徴する新しい軍都に変貌しました。日本陸軍最初の重爆撃部隊である飛行第七連隊、最初の高射砲部隊である高射砲第一連隊は、先端科学の粋を集めた施設として市民に迎えられています。

実は、当時の浜松では、軍国主義に対する批判的感情が強く、特に歩兵連隊的な古い部隊や、前線に出て死んでいく確率が高い部隊に対する拒否意識が非常に強かったのですが、最新鋭の技術を持った部隊がやってきたことによって、浜松の市民はかなりの歓迎をするようになったのです。特に当時は、飛行機を初めて見る人がほとんどでしたから、飛行連隊に対する歓迎は非常に大きかったようです。

飛行連隊や高射砲連隊の場合、在営時に当時まだ希少価値の自動車運転技術を習得する機会があり、除隊後に再就職する場合大きな強みとなりました。不況下の就職難の折、この面でも市民をひきつける魅力を持っていたということになります。飛行連隊が来たことによって、軍隊に対して拒否から歓迎へと世論の変化を作っていく、そのような中で浜松は軍都になっていくのです。

その挙句の果てに、浜松は猛烈な空襲を受けるとい

果にもなるわけですが、いずれにしても、この時期に軍都に大きく変わっていったのです。

参考文献

- 鈴木博詞『戦乱のさなかに―「野戦防空隊」一士官の記録』
一九七〇年（私家版）
- 浜松市役所『浜松市史 第三卷』一九八〇年
- 静岡県近代史研究会編『史跡が語る静岡の十五年戦争―静岡県
岡県の戦争史跡ガイドブック』青木書店、一九九四年
- 平岡昭利・野間晴雄編『中部 1 地図で読む百年―愛知・
岐阜・静岡・山梨』古今書院、二〇〇〇年
- 荒川章二『第二次大戦生活史の発掘―地域の戦争遺跡を探
る』（木村礎・林英夫編『地方史研究の新方法』八木書店、
二〇〇〇年）
- 荒川章二『軍隊と地域』青木書店、二〇〇一年
- 浜松市『浜松市史 新編資料編二』二〇〇二年
- 浜松市『浜松市史 新編資料編三』二〇〇四年
- 浜松市『浜松市史 新編資料編四』二〇〇六年

浜松空襲について

村瀬隆彦

前回、浜松地区が軍事産業と軍隊配置という点から、軍との関わりのなかで「発展」してきたことについて、荒川章二氏からお話があったと思います。そして、第三回の講座では、竹内康人氏から、実際に残る戦争遺跡（遺構）についてお話があることと思います。その間に位置する今回は、浜松地区と戦争を考える上で欠くことのできない空襲と艦砲射撃について考えてみます。

研究の流れ

↑空襲に関する資料

最近「空襲」ではなく「空爆」という言葉を使うことが増えています。しかし、私は「空襲」でいいのではないかと思います。爆弾ばかりではありませんから。撃つ

たものが機関銃であろうと爆発物であろうと、空から襲われるのだから、「空襲」のはずです。ですから「空襲」という言葉の方がいいと思っています。この「空襲」に関する研究の流れについて、最初に概観しておこうと思います。

空襲に限らず、歴史を考える上で重要なのは資料です。資料は、誰によって書かれたか、どのような目的で書かれたか、いつごろ書かれたかなど、いくつかの要素によって、信頼できるかどうかを確認しながら使用します。

人間の記憶は時間が経つとあいまいになっていたり、印象が薄れていたり、逆にある部分だけ強くなったりするものですから、できれば、当事者がその直後に記したものがあれば良いのですが、戦争では、当事者の一方（被害者）は死亡しており、殺人事件の捜査のような難しさがあります。

空襲に関しても、最も証言をうかがいたい人は死亡しているわけです。死亡した人の目線での事実確認という視点を、忘れてはならないでしょう。

さて、米軍による静岡県内各地への空襲についての研究を、資料別に四つに分けて考えることができますと思います。

十 空襲被害調査

一つめが、日本の行政機関によって確認された、空襲の被害に関する調査です。古いものでは、一九四五年七月三日付けで調査結果がまとめられています。

東京の恵比寿に、防衛省の防衛研究所という施設があり、その中に図書館があります。そこは自衛隊の敷地の中にあるため、面会票を書いて中に入ります。閉架式ですから全部目録を引かなければいけません。その中に陸軍省調べの空襲記録があります。陸軍省の調べでは、被害を非常に少なく書いてあるのが印象的ですが、この数字は内務省管轄の調査と大きく異なっています。

手軽に見ることができるものに、『静岡県史 資料編20 近現代5』所収の静岡県調「静岡県ノ戦災概況ト其ノ処理等ニ関スル書類」があります。この資料は、戦争経済の維持という観点から記載されているように思います。

十一 証言集

二つめが、空襲体験者による証言集です。浜松・静岡・清水・沼津などで、「大空襲」の体験談を中心にまとめられたものが知られています。

一九四五年にあつたできごとをまとめることができたのは、一九七〇年代になってからです。米軍の占領によって空襲を語ることが憚られたこともあるでしょうし、空襲による被害を語ることというものが、ベトナム戦争の時の北爆反対の動きとも関連するという研究もあります（小山仁示『米軍資料日本空襲の全容』）。

歴史の資料としては、直後の証言ではないだけに、また、「忘れよう」と思つての毎日であつただけに、貴重な証言であると同時に、記憶の曖昧さが残る資料として慎重に扱う必要があると考えます。

浜松では、浜松空襲・戦災を記録する会『浜松大空襲』が知られています。この本は、一九七三年の六月一日、すなわち浜松大空襲の「記念日」に刊行されています。

なぜ一九七三年なのか、昔から不思議に思っていました。なぜ戦争が終わってからかなり時間が経たないと、このようなまとまった本が出ないのかと思つていたので。

この本にも、「この表面おだやかに見える日本の平和にも、これをおびやかす何かが皆無だとは云い切れない昨今」と

あり、記録を残すことが重要である、と書かれています。

しかし僕の場合は、やはり嫌なことは忘れたい、つまり、身内が悲惨な死を遂げたわけですから、それを直後に冷静な気持ちで克明に記録するなどということは、やはり普通は嫌なことではないかと思います。

もちろん戦争に負けた後は米軍が占領しますので、アメリカのことをあしざまに書くことは憚られたと思いますし、そのあと高度経済成長があり、それが終わって一段落してから、各地で空襲体験者の証言を集めた本が刊行されるようになったのでしょうか。

このような本は浜松だけではなく、静岡では一九七四年、清水でも同年に出ています。沼津はこのように一冊にまとまった厚い本は出ていませんが、沼津史談会からまとめた本が出ています。このように、一九六〇年代終わりくらいから七〇年代くらいに、体験者の証言を集めた本が出てきます。

↑米軍資料

三つめが、米軍の資料で、米国戦略爆撃調査団の記録や、米軍部隊の戦闘記録類です。米国ではこのような軍事機密に係る資料でも、二五年を経過すると開示されます。

多くの日本の研究者が米国の公文書館に行って、とにかく

目録を見てこれだと思うものを、読んでいる暇がないから片端からコピーして持ち帰り、一年かけて翻訳しながら研究を進めています。

現在では、どの地区の空襲についても、従来の研究成果を塗り替える研究が進んでいます。その多くは、米軍資料の精査によるものが大きいといえるでしょう。『空襲通信』という、米国資料の紹介もしている雑誌も刊行されています。

浜松では、阿部聖氏の一連の研究が中心となります。『米軍資料から見た浜松空襲』が、もっとも読みやすくとめられています。

ただ、この一冊にまとめるためにたくさんの論文を書かれています。レポートの翻訳およびその解釈について、ほとんどが『遠江』という雑誌に載っています。

阿部氏は、これまでの研究成果や警防団の日記等も含めて総合的に研究を進めておられます。今回の報告も、阿部氏の成果なくしては成り立たないものです。

↑個人の資料

四つめが、市史編さんや、個人調査によって「発見」された資料です。個人で空襲のようすを日記に記していたり、警防団等で警報の発令・解除を記録していたり、学校の日

誌に児童の被害が記されていたりするものです。

浜松では、浜松市立中央図書館が刊行している、『浜松市戦災史資料』があります。静岡県には、県立博物館も公文書館もあります。県立中央図書館は、調査・研究のための図書館として機能していますが、刊行していた雑誌も廃刊となり、歴史文化情報センターがあるとはいえ、地域の歴史研究情報の発信機関としての役割を十分果たしているとはいえません。浜松市立中央図書館の活動は、その対照をなすものと感じます。

資料の話と観点は異なりますが、次回で報告される竹内康人氏の調査も見逃せません。竹内氏は、『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』を二〇〇七年に刊行されています。亡くなった方々の個人名が掲載されるのが特徴です。

人は最後には数で把握されるものではありません。一人ひとりの個人はかけがえないものです。竹内さんの、氏名で確認してこういう姿勢は大きく評価されます。

だとすれば、空襲での死亡といっても、その死を個々の人のものとするには、詳細な状況の把握ができる情報がなくてはならないでしょう。そのためには、詳細な事実確認のための資料が必要です。

↑『中小都市空襲』

一九八八年に画期的な本が出ます。奥住喜重さんが書いた『中小都市空襲』という本なのですが、奥住さんは歴史の専門家ではありません。工学、自然科学分野が専門で、実際に爆弾を落としたときにそれがどのように落ちていくのか、被害はどのように広がるのかということを、科学的に非常にシャープに描いています。

この本の画期的なところは、米軍の資料をふんだんに使って、それを読み込んでいるところです。日本軍には、戦闘が一段落した段階で、自分の損害、相手に与えた戦果などを書いて、上級の部署に提出する「戦闘詳報」という報告書がありますが、米軍のものはものすごく精緻です。

日本を空襲した部隊が、自分たちがどのような攻撃を行ったのか、どのような成果があったと思われるのかというようなものをレポートしているのですが、使用した燃料の量や当時の天候などが非常に細かく書いてあります。その分析を加えて一冊の本に読みやすくまとめられたのが、この『中小都市空襲』という本なのです。

これまで空襲の調査というと、だいたいは東京をはじめとする大都市が中心でした。広島、長崎のように原子爆弾を落とされたところとはかく、一般空襲に関してはやはり大都市中心だったのですが、この本が出たおかげで、中

小都市の空襲をどのように考えたらいのかということが、ようやく分かるようになったわけです。その後、各都市では、自分のところが書かれているレポートはないか、それらを集める競争になっていきます。

十 米軍資料の信憑性

空襲体験者の証言集に比べ、米軍資料は記載が詳細で正確な印象を受けます。しかし、この英文の資料についても、本当に確かなのか。批判的に読んでいく必要があることに変わりはありません。

米国の資料は数字が精緻で、読んでいるとなるほどと思わされます。しかしその一方で、日本軍の戦闘詳報を読んだ経験からいうと、「本当にそうなの？」とも思うのです。

戦闘詳報は自分の部隊がいかに戦果を上げたかという観点を抜きにしては書かれません。自分は戦ったけれども、「何の戦果も上げませんでした。申し訳ありません」というレポートはやはり書きにくいでしょう。ある作戦行動に参加した以上、何かしらの成果を上げたのだという形で書いていくものではないかと思うのです。

この戦闘詳報をどのように読むかということで参考になったのは、山本七平さんが書いた『一下級将校の見た帝国陸軍』という本でした。この方は、大砲の弾を撃つ係を

していたのですが、「一〇キロ先で当たっているか当たっていないかは分からないけれど、とにかく撃った。撃って、全弾命中と書いた」というのです。確かにそのようなものなのだろうと思います。

最近では『新編浜松市史』の資料編の中には、浜松を艦砲射撃した艦長さんが戦後すぐに『静岡新聞』に書いたものが転載されていますが、「戦果は自分では目で見ていない。当たったか当たらないかは分からない」と書いています。当たったか当たらないか分からないにも関わらず、戦果として何%という数字が並んでいるのです。それを見ると、どこまでが本当なのか分からなくなります。

十一 「圧縮度」

このように、任務の達成度については、部隊の手柄になることが意識されて記されていることがありますが、空襲に関してこのことを示す事例として「圧縮度」があります。

これは米軍が注意していたもので、ある都市を空襲した時、攻撃に参加した航空機の九〇%が、何分間で攻撃したかを記した数字です。短い時間に多くの航空機が爆弾を投下した方が被害が大きいですから、少ない時間の方が効果的な攻撃ということになります。

たとえば、浜松を空襲するB29の部隊を想像してみてく

ださい。それも、高空から高性能爆弾を落とすのではなく、大空襲の夜を考えてみてください。

灯火管制されているので、地上は真っ暗です。レーダーを使つて進入します。B 29も落とされたくないですから、全速を出しています。約七トンの焼夷弾を一機で積んでいますので、全速を出しても時速三五〇キロから四〇〇キロくらいしか出ませんが、それでも浜松の市街地上空を飛び去るのは、ほんの数秒です。

浜松のような小さい市街地の上を飛び、そこに焼夷弾を的確に落とすのは、非常に難しいことです。タイミングが少しずれただけで、まったく違うところに落ちてしまいます。

六月一八日の浜松大空襲の場合は、伊勢湾沿いに入つて来て、浜松で落として、横須賀から海に出て、帰っていきました。落とした後、急旋回して自分の基地の方へ戻っていくわけです。

浜松などを空襲するB 29の部隊は一二〇機くらいですが、特に夜間空襲の場合は、米軍の中でもっともベテランで、もっとも腕のいいレーダー手が乗っているB 29が六、七機選ばれて、そのレーダー手が見ながら最初に焼夷弾を落とします。そうすると炎が出ますから、後ろの飛行機はレーダーを見ないで、燃えている焼夷弾に向かって焼

夷弾を落として南の空へ逃げて——当時の言葉で言うところ「脱去」して——いくわけです。

そのときに上司から命令されているのは、最初にベテランパイロットが焼夷弾を落としてから、最後のB 29が落とすまでの間の時間を短くすることです。この時間が短ければ短いほど褒められたようです。

たとえば同じ一〇〇発の爆弾を落とすのも、一度に一〇〇発落ちるのと、一時間に一発ずつ一〇〇時間かけて落とすのでは、当然一度に落とした方が相手に対するダメージが大きいわけです。これが「圧縮度」で、ノルマとして課されているのです。

浜松の場合は、六月一八日の空襲で、六六分です。六月一八日の空襲では、マリアナのサイパン島の上空で飛んだ約一二〇機のB 29が編隊を組み直して来るわけではなく、一機一機の飛行機が燃料を節約するために自分で飛びます。伊勢湾の上空で浜松の方に旋回をして高度を下げながら速度を上げ、焼夷弾をバラバラと落として南へ行くのですが、約一二〇機が六六分ということは、約三〇秒に一機進入しているのです。

空の上での三〇秒は、ちょっと間違えれば衝突する距離です。時速四〇〇キロ出ている飛行機の三〇秒間隔の話です。で、車の三〇秒とはわけが違います。

はたしてそのようなことが可能なのかという疑問があります。したがって、これが、どの程度正確なのかは、日本側資料との突き合わせも必要になってきます。

藤枝防空監視哨の記録

↑藤枝防空監視哨資料の概要

このようなことを考える時に、日本側の客観的な資料として注目されるのが、防空監視の資料です。浜松の防空監視隊については『浜松大空襲』の本の中にも載っていますが、今日ご紹介したいのは、藤枝の防空監視哨の記録です。

これは、藤枝市在住の方が藤枝市郷土博物館に寄贈された資料です。おじいさんが亡くなって、重要な資料だというのを聞いていたから博物館に持ってきたというのです。

実は、藤枝の防空監視哨の哨長さんは、戦争が終わった時に、書類を焼けという命令をもらいます。これは有名な話で、戦争が終わると、そこら中で重要機密書類を焼く炎が上がっていたという話が記録されています。これは防空監視哨だけではなく、浜松の飛行場の記録も、浜松の陸軍飛行学校も高射砲も航測部隊も毒ガス部隊も資料を焼いたはずです。

ところが、藤枝の防空監視哨の哨長さんは、「これは焼い

ちゃいけない資料だ」と思って、大事に家まで持って帰って、ダミーを焼いたようなのです。その一つが「指揮連絡通帳」というもので、昭和〇〇年の〇月〇日の〇時〇分にB 29がどこにいる、〇時〇分にどの地区で空襲警報が出た、何時何分で解除になったという記録が書かれています。指揮と命令を受けたのを全部記録している帳簿です。

↑資料としての信頼性

また、監視哨から見えたもの、きこえたものも書かれています。これは、浜松と静岡の空襲について確認するための新たな事実を提供するものだと思います。

一つは、この記録を書いた人が当事者ではないということです。当事者ではないので、戦果を上げたことを誇張して書く必要がないのです。

もう一つは、正確に見て正確に記述することが仕事だったということ。正確に書けば書くほど褒められる仕事なので、ある程度信頼できる記録であると思われます。

このことを示すエピソードがあります。この人たちは一度怒られているのです。夜は飛行機が見えないですから、爆音で判断します。何回も何回もB 29が飛んでいれば、B 29の音だと分かるようになります。しかも爆弾を積んでいるのか落とした後なのかまで聞き分けられるということ

す。夜なので見えていない。見えていないけれども確かにB 29の音なのでそう書いたら、「B 29とは書くな」と怒られたそうです。「大型双発機とか敵大型爆撃機と書け。B 29と書けるのは、実際にサーチライトで照らされたり昼間に見た時だけだ」という指示まで出ているのです。

つまり、聴音のみで絶対確実でない場合は、機種を報告しないよう軍から指示されているのです。視認の場合のみ、機種の記載があります。厳密さが大事にされており、これは資料としての信頼性にかかわるものだと思います。空襲のことを確認するのにいい資料だと思います。

↑防空監視哨について

ここで、防空監視哨について、お話しておきます。防空監視哨は、米軍機や友軍機の飛来状況を確認し、監視哨本部に連絡する役目をもっていました。

集められた情報は分析され、陸海軍の司令官が「警戒警報」や「空襲警報」の発令や解除などに活用されます。監視員が軍人の哨と、民間人の哨がありましたが、数が多いのは民間の哨でした。

ちなみに、軍人の防空監視等の要員を養成する任務で設置されたのが、磐田の第一航空情報連隊です。浜松陸軍飛行学校の航空機等を監視の練習に活用したようです。

浜松市復興記念館にも、防空監視哨資料が展示されていますし、先ほども申し上げましたが、『浜松大空襲』にも浜松防空監視隊本部の記事がみえます。

↑藤枝防空監視哨の任務

ところで、藤枝防空監視哨がどこにあるかというと、藤枝市の中央にある蓮華寺池公園付近です。観光で行かれた方も多いかと思いますが、付近には藤枝市郷土博物館や藤枝市文学館などがあります。

蓮華寺池は、江戸時代に村人総出で作った人工の池で、その池の周りが公園として整備されています。公園の中には、お姫平とよばれる高台があります。江戸時代に藤枝を治めていた田中藩のお姫様にちなんでいるといわれていますが、この高台に防空監視哨がありました。

ここから静岡・清水方面を見ると、静岡の市街地は見えませんが、飛行機から物を落としているようすは十分見えます。浜松は、牧の原台地の向こうに見えるわけですが、強い光や大きい爆発音は確認でき、飛んでいる飛行機のようすも肉眼で見ることができます。防空監視哨では、実際に肉眼でも監視していましたが、三脚のついた倍率の高い双眼鏡も使っていました。

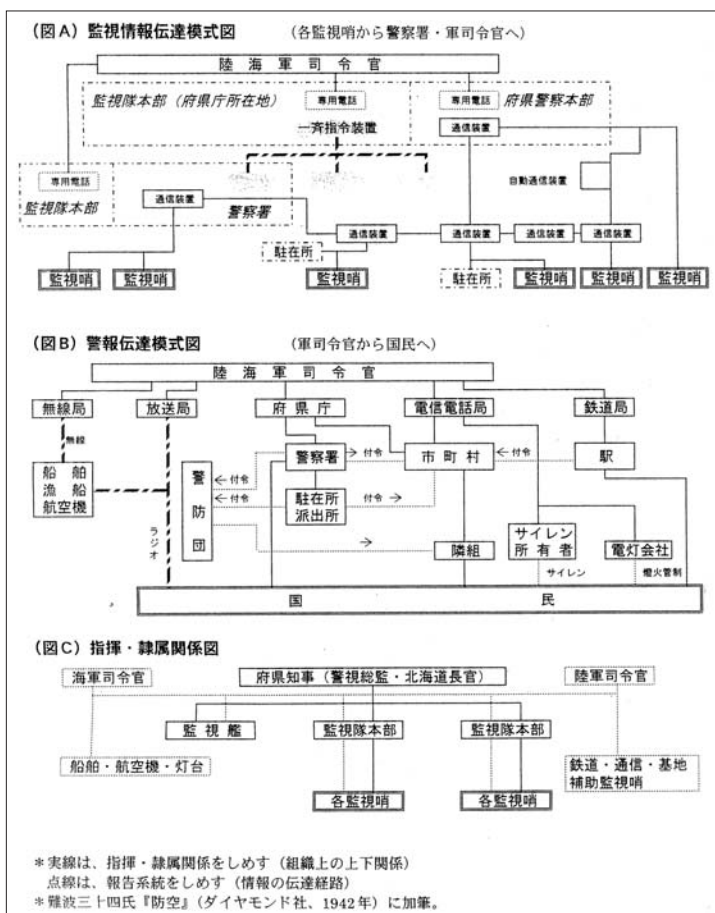
航空機の情報を得るためには二四時間体制での監視が必

要になりますから、哨員は、藤枝の場合は五つの班に分かれて朝七時交代で任務についています。主に青年学校の優秀な方々が任命されていました。

十 情報伝達の経路

より確実に監視を行うには、各監視哨にも、防空体制の現状を連絡する必要があります。藤枝防空監視哨では、その指揮・連絡事項を書き留めていました。その中に、警戒警報と空襲警報の発令・解除と対象地区範囲の記載があります。どのような形で空襲警報や警戒警報が出たのかについては、図1で模式的にまとめてみました。戦時中に出た防空関係の資料をいろいろつなぎ合わせて作ったものです。国民に伝達されるまでには時間がかかりますが、監視哨の場合は、軍からの伝達が迅速で、しかも正確です。

各監視哨で見たものが陸海軍の



司令官に上げられ、陸海軍の司令官が放送局や無線局や鉄道などを通して、あるいはサイレンや隣組などを通して国民に知らせていきます。自分が見るための情報も含めて書き留めている防空監視哨の資料は、この点についてもかなり精密なのではないかと思っています。

図1 情報伝達模式図／『藤枝市史研究』5号(2004年)より

↑藤枝防空監視哨資料のオリジナリティ

というのも、藤枝防空監視哨では二四時間体制で監視・聴音を行っているからです。日記を詳細につけている人もいますが、二四時間体制での記載は個人では不可能です。また、ラジオに頼った情報ではなく、軍から届けられる情報が記載されていることも重要です。敵機の来襲が予想されると、監視体制を強化するよう指示がきます。

さらに、監視員は監視のための訓練を受けています。軍が捕獲したB 17等を飛行させて、高度・方向を聴音する練習も、幾度となく記載されています。

藤枝の位置も重要でした。富士山に向かって駿河湾上空を飛行するB 29をとらえられるだけでなく、静岡市・清水市の上空や牧之原台地上の海軍飛行場のようす、そして浜松上空が視認できるからです。

今回、この講座の講師をお受けできたのは、藤枝防空監視哨の資料があったからです。特に、警戒警報・空襲警報の発令・解除の時刻について、このように模式化したのは初めてだろうと思います。もしかすると、東京や大阪ではあるのかもしれませんが、少なくとも静岡県域では初めてだと思います。

ただ、欠点があります。それは、軍の管区が静岡県の真中で切れていたことです。それによって、藤枝防空監視

哨に入ってくる情報は、中部軍管区（東海軍ができてからは東海軍管区）のものが大半です。ということは、表の中の「県警戒警報発令」とある「県」とは、薩埵峠^{さだたけ}以西の静岡県という意味であろうと思います。

この資料を加えて、これまでの浜松空襲に関する研究成果をみていきたいと思います。

B 29・M 69開発の流れ

↑戦略爆撃とは

それでは、浜松の空襲に関連する範囲で、米国戦略爆撃部隊とその兵器について、その流れをまとめてみましょう。

まず、戦略爆撃とは、「敵の実戦部隊への攻撃を任務とするのではなく、敵の産業的策源地に攻撃を加え、その機能を破壊すること」と定義しておきましょう。そのような目的のために常設された部隊を、戦略爆撃部隊とよぶことにします。

その目的の達成のためには、前線を飛び越えて、敵国の産業の策源地まで飛行して、空襲を実行できる能力を持った航空機と、その航空機から投下する爆弾の開発が必要になります。

あまり知られていませんが、日本軍も戦略爆撃専門部隊

に近い部隊を持っていました。漢口飛行場から重慶に爆撃にいく陸軍航空部隊の一つである飛行第60戦隊です。

当時の新型爆撃機（97重爆Ⅰ型）を通常の定数よりも多い航空機（三六機）と予備機を装備し、独力で戦闘機の攻撃を排除できるだけの武装を搭載（機体の改造）していました。浜松の重爆部隊の一部がもとで編成された部隊です。重慶の市街地への爆撃を行っていました。「目標市街地」「全弾命中」と記された資料が、防衛省防衛研究所に所蔵されています。

米国は、ドイツ軍の英国本土空襲や日本軍の重慶爆撃等で、それぞれ数千人の死者が出たことを批判していました。したがって、昼間に、高々度から、高性能爆弾で、目視により、軍事施設や軍需工場等のみを破壊する爆撃方法をとる考え方が主流でした。

十 焼夷弾の威力

一方で、ドイツ軍の英国本土空襲で使用された焼夷弾の威力にも注意が払われてきました。住宅地への焼夷弾の攻撃は、破壊力が大きいことに注目したのです。

焼夷弾は、火災により施設の焼却を狙うものです。ここでは、詳細な分類は避けて、焼夷弾を狭義の焼夷弾と焼夷爆弾に分けて説明しましょう。

狭義の焼夷弾は、筒に油脂等が詰められたものです。油脂等に着火させる目的で頭部に少量の火薬が詰められていますが、爆発により殺すことをねらったわけではありません。火炎の吹き出して火災を起こさせるのが目的です。ただ、火炎の吹き出しの反動で動きますから、危険なものでもあります。

それに対して焼夷爆弾は、筒内の油脂等に着火させるのに必要な量以上の火薬が詰められています。爆発によって油脂類が飛び散り、消火活動や避難活動を妨げる目的のものです。日本本土への空襲では、約三割が焼夷爆弾であったことが確認されています。

焼夷弾は、密集建造物のある土地でなくては効果が少ないですから、市街地に集中して投下する必要があります。したがって、拡散を防ぐために低高度での投下が求められます。

そうになると、防空側の地上砲火は峻烈になり、戦闘機の緊急発進も容易になりますから、夜間攻撃の必要性が高まることで、目視によらない攻撃、すなわちレーダーの装備が必要になってきます。夜間に、低高度から、焼夷弾で、レーダー等により、市街地そのものを破壊する爆撃方法がとられるわけです。

↑焼夷弾の開発

そこで問題になるのは、投下地に適した焼夷弾の開発でした。日本のような木造家屋の場合、あまり重い焼夷弾だと、もつとも効率よく焼夷効果のあがる屋内にとどまらず、地面までつきぬけてしまいます。

無差別爆撃を批判した米国では、焼夷弾の開発は、英独に比べて遅れました。軍事施設等の耐久建造物を攻撃する一〇〇ポンド焼夷弾は一九四〇年一月には完成させますが、小型のものは一九四一年五月に英国のものを移入したとされています。

しかし、米航空隊はそれではしませんでした。ユタ州ソルトレイクシティ郊外の爆撃試験場に日本家屋二〇棟とドイツ家屋九棟を建設し、塗料や内装、家具にいたるまで復元し、焼夷弾投下実験を実施しています。

日本の家屋に使われているヒノキはアメリカでは手に入らないので、最も似ている木材をソ連から調達し、畳はハワイに移住した日本人の家屋のものを集めたといわれます。一九四三年五月のことでした。そこで日本家屋にもドイツ家屋にも適した焼夷効果のあったものとして、M 69収束焼夷弾が選ばれました。

↑M 69収束焼夷弾

M 69収束焼夷弾は、一本が直径三インチ（七・六二センチメートル）、長さ二〇インチ（五〇・八センチメートル）、重さ六・二ポンド（二・八〇九グラム）の正六角柱で、それが三八発集めて一つの大きな爆弾のような形状をしていました（図2）。

それが投下数秒後にバラバラに別れ、一つ一つの焼夷弾は尾部から白い布をはためかせながら落下していきます。その重さと落下速度が日本家屋に適し、瓦屋根を貫通して天井裏か畳の上で発火するものでした。実験写真を見ると、二階建ての日本式家屋は、二〇分で一、二階とも全焼しているようすが確認できます。

一九四三年一〇月一五日、実験スタッフから米航空軍司令部にレポートが提出されました。『情報部焼夷弾レポート』と題されたレポートには、「東京はじめ大阪・名古屋・神戸などでは住宅密集地に隣接して大小工場が多く存在する。このようないわば混在地域では、焼夷弾による延焼率が高く、空爆目標に最適である」とあります。

当時の欧州戦線では、昼間高々度精密爆撃が威力を発揮していましたし、焼夷弾の生産も軌道にのっていませんでしたから、このレポートによって状況が変化したというわけではありません。しかし、一九四三年秋の時点で、米軍

が焼夷弾の効果を十分認識していたことは、疑う必要はないでしょう。

↑B 29の開発

次が、戦略爆撃を実施する航空機の開発です。日本本土はB 29によって焼き払われたのは御存知だと思います。B 29は、当初はドイツが中南米に基地を設けた場合に爆撃できる航空機として着想されました。一九三九年十一月のこ

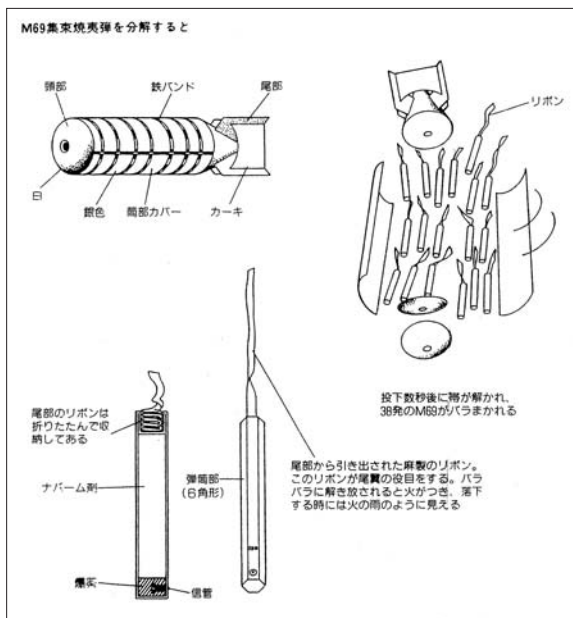


図2 M69収束焼夷弾の仕組み／平塚征緒『米軍が記録した日本空襲』より

と思われる。

一九四〇年五月には、まだ試作機が飛んでもいないうちに、B 29の生産について調印され、一九四一年九月には二五〇機が発注され、一九四一年二月にはさらに二五〇機が追加されました。

B 29の試作機ができたのは一九四二年九月。一九四三年一月のカイロ会談で対日本本土爆撃計画であるマッターホーン計画が承認されていきます。B 29本体と焼夷弾は、同時に開発されていたのが分かります。

B 29のデータを確認しておきましょう。翼長が約四三メートル、全長が約三〇メートル、乗員は定数一名（実際はそれ以上乗っている場合もそれ以下の場合もあります）、与圧装置付きの機内に、遠隔操作の防御火器として、二〇ミリ機関銃一丁と一二・七ミリ機関銃が一二丁が搭載されています。

銃手は震動と騒音から離れ広い視界のなかで操作にあたるができます。射手が照準するコンピューター連動の照準機は、的までの距離・高度・気温・風速を自動解析します。後年、朝鮮戦争でミグ15の迎撃にあつたB 29が撃墜をまぬがれたのが、この防御砲火によるものでした。

巡航速度は時速三五〇～四〇〇キロ、最高速度は時速五六〇キロ程度です。爆弾搭載量は五〇〇〇ポンド（約二・三

トン)ですが、浜松空襲の頃には、機銃を減らして六・七トンの焼夷弾を積んだ機が現われます。レーダーが全機についているのも特色です。

†B29の性能

B29の特色でもありネックでもあったのが、スーパー・チャージャー付きの二二〇〇馬力エンジン四基です。一九三六年に開発が始まりました。

実は、B29にとっての一番の敵は、偏西風でした。日本の上空はものすごいジェット気流が流れています。B29は完璧にできているようにみえますが、四〇〇機以上も落ちていきます。しかも、高射砲によつて落とされたというより、故障で落ちているのが案外多いのです。原因はエンジントラブルが多いと考えられています。

もちろん当時の日本の技術では開発できない、あるいは開発はできても材料がなくて作れないようなエンジンでした。日本軍も、フィリピンで捕獲したB17の過給装置をコピーしようとしたが、ファンの回転・温度に耐えられない素材を確保できず、量産はできませんでした。しかし、B29にとつても、最後までネックになったのがやはりエンジンだったのです。

今の自動車のエンジンを考えてみてください。シリンダー

の中を真空状態にして、その中に空気とガソリンの混合気を給入し、点火・爆発させて動力にしています。爆撃機にとつては、高空に行けば行くほど、高射砲の弾が届かないですし、敵の戦闘機も上がってこれませんから、被害が少なくなります。しかし、高空に行けば行くほど空気が薄くなりますから、エンジン内に空気を入れようとしても、バキューム原理だけではエンジン内に入る空気の量が確保できず、したがって出力が低下します。

たとえば、B29のエンジンは五万四〇〇〇ccありますが、その中に入ってくる量が三分の一になってしまうと、馬力も三分の一しか出なくなります。それを補うために、排気を動力としてファンを回し、空気を強制的にエンジン内に送り込むことで出力低下を防ぐ方法がとられます。それが今ターボ・チャージャーやスーパー・チャージャーといわれるものです。

今、普通に走っている車でも、ターボ・チャージャーやスーパー・チャージャーが付いているエンジンがありますが、インタークーラー付きという車も多いのではないかと思います。インタークーラーとは、ファンで押し込んで熱く薄くなった空気を、送り込む途中で冷やすことで濃くしてエンジンの中に入れるための機械のことです。B29のエンジンにもインタークーラーが付いています。したがって、高々

度性能が日本軍戦闘機とは比較にならないほど優秀だったのです。

↑B29の弱点

しかし、一方で超高速で回転するファンの安定性は不十分で、均質な作製が難しいことから破損したり、高熱に耐えられず発火したりしました。しかも、そのオン・オフを半分手動、半分コンピュータでやっていて、その操作に慣れていないと、オーバーヒートを起こすようなのです。試作機二機はオーバーヒートで火に包まれ、特に一九四三年二月一八日にはボーイングの主任操縦士ほか乗員一〇名が死亡する事故も発生しています。

もともと、夜間焼夷攻撃の場合は、低高度での投下になりましたし、迎撃の任務にあった日本軍戦闘機の方が高速でしたから、探照灯を投射しての迎撃は可能であったはずですが。しかし、その頃は硫黄島に進駐した米陸軍戦闘機が援護につきましたので、初期は高々度であるがゆえに、後期は随伴戦闘機が存在が想定されたために、戦闘機による迎撃は、あまり効果を期待できなかったということがいえます。

あとは地上にあるうちに攻撃することでした。硫黄島を経由してのサイパン攻撃は浜松からも浜松教導飛行師団を

母体に編成された独立飛行隊などが実施されますが、硫黄島が戦場化してからは、不可能になっていきます。

日本空襲の流れ

十空襲の始まり

まず、日本空襲は、中国成都から北九州に向けての空襲からはじまります。B29の航続距離をもっとしても、北九州が限度でした。一九四四年六月一六日が最初です。

成都への進駐は、蒋介石が対日戦列から脱落するのを防ぐ目的もあったといわれます。ヒマラヤを越えての空輸にたよる補給状況であり、満足な基地機能でなかったのは明らかでした。

マリアナ諸島が日本本土空襲に適した距離にあり、飛行場の適地も多いことから、成都からの北九州空襲が開始された頃には、米軍は占領に向けての具体的な作戦を実施していました。

一九四四年七月七日に、サイパン島の日本軍の組織的抵抗が終わります。テニアン島が八月三日、グアム島が八月一日です。一月には運用ユニットとして完結する一個爆撃機集団のマリアナ進駐にして、すぐに日本本土の偵察を行います。

藤枝防空監視哨の資料には、一月一日の一三時二二分～一四時三五分に空襲警報が出ていることが記されています。B 29の偵察機型をF 13といいますが、その形式であることが、米軍資料に記されています。

資料をみると、お昼くらいの時間に警戒警報や空襲警報が出ていることが分かります。B 29の巡航速度では、マリアナから本土まで約七～八時間ですので、夜明けとともに離陸した偵察機は、この時刻に静岡県上空に現われるのでしょう。

マリアナのB 29部隊の日本本土初空襲は、一月二四日です。一月七日～一月二三日までの間は、空襲警報一回のみと警報発令が少ない状態が続くのが分かります。

撮影写真の分析をもとに、B 29部隊のマリアナからの初空襲が行われます。一月二四日です。第73爆撃ウィングによる中島飛行機武蔵製作所への昼間精密爆撃です。

中島飛行機の武蔵製作所は、日本軍機のエンジン等の重要部品を製造している重要工場と米軍は理解していたし、事実そうでした。一一一機が出撃し、武蔵製作所を攻撃したのは三五機（三三二％）で、その他は臨機の目標に投弾しています。県内では五機が爆弾九発と焼夷弾二個を松崎に投弾しているようです。

↑無差別都市空襲

米軍は、ドイツ軍や日本軍の無差別都市空襲を批判し、軍需工場等に対する精密爆撃を信条としたはずです。しかし、日本上空で出会った最大の敵は、雲と風でした。雲がかかった場合は第二、第三の目標が指示されましたが、その目標への投弾も不可能なら、臨機目標への投弾を指示していました。

日本列島のように海に高い山が面しているような場所は雲が発生しやすく、第一目標への投弾は難しい場合も多々ありました。

一方、偏西風はすさまじく、偏西風にのった場合、対地速度は時速七〇〇キロ近くになった場合もあったようです。そうになると、高々度からの精密爆撃など、実施できようはずがありません。また、臨機目標への投弾は軍需工場のみを目標にするはずありません。

すなわち、日本は米国爆撃部隊の信条とは別に、当初から、目標をそれた高性能爆弾や、臨機目標に投弾された高性能爆弾により、結果として日本本土は無差別爆撃の場になったといっていでしょう。

↑B 29部隊

ここで、B 29部隊について確認しておきましょう。B 29

部隊は、一般の米陸軍航空隊とは別系統で運用されていた。そうでないと、B 29を戦術的に利用されてしまうからです。

米軍の統合幕僚会議のもとに第20航空軍（エアフォース）があり、その下に第21爆撃軍（No.21爆撃コマンド）があり、その下にいくつかの爆撃ウイングがあります。

一月当初は第73爆撃ウイングだけでしたが、だんだん増強されていきます。爆撃ウイングは一二〇機程度のB 29を保有しています。今後、浜松等、中小都市への空襲は、この爆撃ウイング単位での攻撃になります。

第21爆撃コマンドの下には四つの爆撃ウイングが配備されていましたので、浜松などの地方都市は、一夜で四都市がほぼ同時に攻撃されるのが常でした。

↑浜松初空襲

一九四四年一月二七日が浜松初空襲です。第73爆撃ウイングが、中島飛行機武蔵製作所（第二目標東京市街地・港湾施設）をねらいました。そのうち七機が臨機目標として浜松を爆撃しました。藤枝防空監視哨の資料でも、二七日はちょうどお昼頃に空襲警報がでている記載があります。

ここで、防空監視哨の資料をみてみましょう。空襲警報が中二日（三日で発令されています。米軍の資料でも、日

本土への攻撃日は一月二七日、二九日、二月三日、八日、一日……とあります。藤枝資料の警報発令・解除はF 13等に対するものなのでしょう。

出撃して昼間爆撃をすればマリアナに帰るのは夕刻（夜になりますから、翌日補給と爆撃成果の偵察飛行を実施し、分析して搭乗員に確認し、出撃するのは三日後、ということなのだろうと思います。

次に浜松攻撃の記載があるのは、二月一三日です。第一目標は三菱重工業名古屋発動機製作所です。七機（七九％）が第一目標に投弾、残りの一機が浜松に投弾しました。佐藤・天神・木戸・相生・中島一帯に爆弾が投下されています。

次が二月一八日で第一目標は同じで浜松には一機、次が二月二二日で第一目標はやはり同じで浜松には一機、次が二月二七日に中島飛行機武蔵製作所が第一目標で藤枝では北に向かうB 29を四二機視認しています。浜松郡部に投弾の記録があります。

↑浜松への投弾のようす

さて、ここで、阿部氏の整理にしたがって、浜松への投弾のようすを確認してみましょう。これまで、浜松は「爆弾のゴミだめ」と表現した、一九四五年一月二〇日から爆

撃コマンドの司令官となったルメイの回想の言葉により、目標に到達できなかったB 29は浜松に投弾するように指示されていたと理解されてきました。

阿部氏は、米軍資料の「浜松」とは何を指すのかを、西遠州地域の「常識」（浜松市街地）ではなく、米軍の資料から確認されました。

図3は、阿部氏が書かれた『米軍資料から見た浜松空襲』に載っている地図で、米軍がいう浜松の位置を示しています。もちろん現在のように合併して大きくなった政令指定都市の浜松ではなく、もっと狭い範囲の市街地でもあります。図3の数字は米軍の空襲の識別番号です。21が「HAMAMATSU」と書いてあります。ここから阿部氏は、浜松とは西遠州から東三河くらいまでの範囲を指しており、都市名というよりは米軍の設定した地域名として理解すべきであるとの見解を述べられました。

ですから、米軍が浜松に爆弾を落としたといっても、浜松市街地に落としたのか、それとも磐田から豊橋までの間のどこかに落としたのかは厳密には分かりません。しっかりと資料を読んでみると、全部が浜松の市街地に落ちたことになってしまい、浜松の小さい市街地にもすごい量の爆弾が落ちたことになってしまいうことになるわけです。

このように「浜松」の範囲を設定して考えてみると、レー

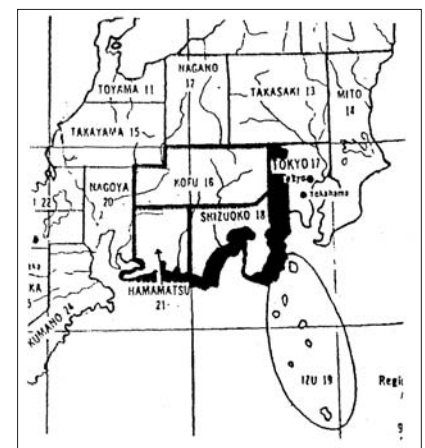


図3 中部地方の空襲識別番号／阿部聖『米軍資料から見た浜松空襲』より

ダーでも目視でも確認しやすい浜名湖が中心にあるこの地域が、目標を確認できなかったB 29が洋上でやすい地点であることが分かります。そしてそこに爆弾を投下していくようにという指示だったようです。

一九四五年一月の空襲

次の一月三日が名古屋ドックが第一目標、浜松には九機で植松・神立・天神・名塚・向宿・子安にと、湖西にも投弾がありました。

次が一月九日で、第一目標は中島飛行機武蔵製作所で浜松には六機。

次が一月十四日で、第一目標は三菱重工業名古屋航空機製作所で浜松には一機。三ヶ日・岩水寺・見付・天竜にも着弾の記録がありますから、一機ではないかもしれません。

次が一月一九日で、第一目標が川崎航空機工業明石工場。

浜松には二機（神立・上西・細島・曳馬）。

次は一月二三日で、第一目標が三菱重工業名古屋発動機製作所。浜松には投弾の記録がありませんが、湖西にありません。藤枝資料によれば、県内に空襲警報は出ませんでした。

次が一月二七日で、第一目標は中島飛行機武蔵製作所、浜松には二機です。飯田に着弾しているほか、舞阪にも記録があります。この日はいわゆる銀座空襲の日です。武蔵製作所が雲で覆われ、レーダー爆撃した高性能爆弾が、銀座に着弾しました。

この日以外に着弾の記録がある日があります。これはどのように解釈すべきかわかりません。正式な攻撃ではない日の投弾記録ということになります。通常爆装しないF13が投弾したのか、偵察にきたB29が投弾したのか、詳細は分かりません。ルメイ自身も、「浜松に投弾した正確な回数は分からない」と記しています。

十一月四五年二月の空襲

さて、二月からは第73爆撃ウイングのほかに、第313爆撃ウイングが攻撃に参加するようになります。二つの爆撃ウイングが、あるいは同時に、あるいは違う日に、本土空襲を実施していきますので、警戒警報・空襲警報の発令が、

次第に複雑になっていきます。

また、硫黄島攻略のための支援作戦として、日本本土の航空基地等への、米空母艦載機の戦術攻撃が、これに加わります。第313爆撃ウイングはB29に習熟するために、パガン島やトラック島も空襲していますが、ここでは日本本土に関連したものだけを取り上げます。

二月四日は、両ウイングが第一目標は神戸市街地として攻撃、浜松への投弾はありません。ここで市街地を第一目標としていることが注目されます。爆撃コマンドの司令官が、一月二〇日にカーチス・ルメイに変わっての変化と考えることができると思います。

ルメイは日本の工業力を奪うには、市街地の焼却が肝心であるとの持論をもっていました。下請け工場・従業員の住宅そのものを奪うことが、日本の生産力を奪い、勝利への早道との考えです。ドイツへの焼夷攻撃によりその有効性を実感しての持論でした。

焼夷攻撃は無差別攻撃です。こうした考え方を持つ人物が、爆撃コマンドの司令官となったということは、米国の爆撃方針が変化した、と考えて良いと思います。

しかし、ルメイが司令官になって、通常爆弾での攻撃がなくなったり、昼間攻撃がなくなったわけではありません。焼夷弾の生産量も限りましたし、攻撃方法そのものの

を変化させるわけですから、搭乗員の訓練等も必要です。

特に、編隊を組まず、単機低高度で、夜間にレーダーなしは火災を目視して侵入、投弾後急旋回して離脱、という方法は、危険な要素の大きい攻撃方法であり、第73爆撃ウイング以外の部隊の習熟も必要であつたろうと推測します。

次が二月一〇日で、第一目標中島飛行機太田製作所、浜松へは意図的に牽制部隊として二機が投弾し、砂山・寺島・北寺島・龍禪寺・中島・領家に着弾の記録があります。

二月一五日は、両ウイングによる第一目標が三菱重工業名古屋発動機製作所への攻撃で、浜松へは一一機が投弾とあります。一方で、浜松に五四機との記載もあります。帰還時に通過した数かもしれませんし、「浜松」のとらえかたの違いかもしれません。

二月一六日、一七日は、航空母艦レキシントン等からの艦載機の波状攻撃です。戦闘機・艦上爆撃機・艦上攻撃機九五機と二〇機でした。

藤枝資料をみると、夜明けとともに空母を発艦し、日没に間に合うように帰投しているようですがわかります。県内の軍事施設は、大打撃を受けました。藤枝資料には、空襲を受ける海軍の大井飛行場と藤枝飛行場のようですが確認できません。また、『浜松大空襲』でも、この日の機銃掃射の体

験談がいくつか載っています。

B 29部隊の次の空襲は二月一九日で、両ウイングによる第一目標が中島飛行機武蔵製作所への攻撃。浜松への投弾はなし。

次が、両ウイングに第314爆撃ウイングが加わって、二月二五日に東京市街地目標の空襲がありました。浜松へは一一機が投弾し、馬込・八幡・富塚・泉・助信・新津・寺島・海老塚・積志・笠井新田に着弾しています。

一九四五年三月の空襲

そして三月四日が第73・第313ウイングによる中島飛行機武蔵製作所への攻撃で、浜松へは九機による投弾、東伊場・泉・高林・曳馬・雄踏・大久保への着弾です。湖西・大知波にも投弾の記録があります。

そして、三月一〇日の東京大空襲の日を迎えます。九日～一〇日にかけての県内は、警戒警報が二回出ているだけで静かです。それもそのはず、三ウイングの全力三二五機が東京に投弾します。夜間・単機侵入・低空・レーダーと炎の目視による焼夷攻撃の開始です。

間髪を与えず、三月一～一二日に名古屋市街地に三ウイングの三一〇機、浜松に一部が投弾とあり、藤枝監視哨では浜松方面に強光七回を視認しています。

三月一三日に、三ウイングの二九五機が大坂に、三月一六日は神戸、一八日がもう一度名古屋を空襲という状態です。

そして、三月末から四月中旬にかけて、焼夷弾を使い果たして補給を待つ爆撃コマンドは、軍需工場への昼間高々度精密爆撃、瀬戸内海への機雷投下、そして、ルメイが猛反対したと伝えられる、沖縄上陸作戦のための九州南部の飛行場攻撃という戦術利用がなされます。

三月一三日から三月いっぱいまで、県内は、警戒警報だけで空襲警報がほとんど出ない、比較的「静かな」日が続きます。

これを見ると、夜間焼夷攻撃は、米軍の意図しないもう一つの効果と一つの損失があったことが確認できます。低空でまっすぐに東京市街地に向かうB29を、県内の監視哨は聴音・目視をできていません。

高々度を昼間飛行していた時には、駿河湾上空を飛ぶB29を聴音できていました。夜間飛行することで視認はできず、低空を飛行することで、聴音範囲も限定されるのです。う。

一方で、それは警報発令地域の限定という形にもつながります。警報発令による待避作業によって、生産が遅滞するという範囲は、少なくなるのかもしれませんが。

十一九四五年四月の空襲

四月～五月初旬まで、米軍資料には九州南部の日本軍飛行場の名称が第一目標に記入されていることが多く、沖縄作戦支援爆撃が多いことが分かりますが、B29部隊は日本本土に習熟したらしく、同日にウイングごとに別目標が指示されていきます。そのなかには、本土の軍需工場を第一目標とする記載にも出会います。

四月三日～四日は、群馬県の中島飛行機小泉製作所と立川飛行機とならんで、静岡市の三菱重工静岡発動機製作所が第314爆撃ウイングによって、夜間攻撃を受けています。

浜松で空襲を受けた記載があるのは四月七日で、第73爆撃ウイングが中島飛行機武蔵製作所を、第313・314の両ウイングが三菱重工名古屋発動機製作所を、昼間爆撃した時です。野口・助信・新津・成子・菅原・宮竹・和合・半田・積志に着弾の記録があります。

四月二四日は、第73爆撃ウイングが第一目標の日立航空機立川製作所ではなく、「静岡飛行機工場」を爆撃したとあります。藤枝で一二〇機が視認されている昼間爆撃です。

そして、四月三〇日空襲として知られている、浜松を第一目標とした昼間の高性能爆弾による空襲を迎えます。中島武蔵、三菱名古屋等の主要工場の機能が麻痺したと判断したのでしょう。

この日は、立川陸軍航空工廠とならんで、浜松の楽器会社（日本楽器）と浜松市街が記載され、第73ウイングの七九機が浜松に投弾し、火災が起ったと記されています。

ここで、日本楽器について説明しなくてはなりません。楽器メーカーは精密機器の使用や、木工技術が集積されていることから、軍需工場に転用しやすいことは、第一次世界大戦のヨーロッパで実証済みであり、日本楽器でも第一次大戦後、特に木製プロペラ（ちやちな印象ですが、金属製よりも圧縮合板のプロペラの方が、柔軟性もあって大出力エンジンのペラに向いているという書物もあります）では、かなりのシェアを誇っていました。

レシプロ飛行機はペラがなくては飛びませんから、米国の合理的な考え方が、日本楽器の攻撃順位を高めたのでしょう。日本楽器のプロペラ生産については、荒川先生からお話があったと思います。

十一九四五年五月の空襲

五月は、まだ沖縄戦支援のための九州南部の飛行場攻撃と、それに関連してか関西以西の都市と機雷投下が攻撃目標になっています。

そのなかで、五月一九日空襲があります。第一目標は立川陸軍航空工廠・立川飛行機工場・浜松市街地（レーダー）

です。浜松には二七二機が投弾とあります。浜松東部と北西部に着弾の記録があり、米軍資料にも六四エーカーが焼失と記されています。

この頃から、藤枝で目撃される敵機にB24が目立つようになります。超低空で単機で侵入し、南方に去っていくのです。お昼くらいに来ることが多く、硫黄島からの飛来でしょう。

五月二四日、二五日、二九日に、それぞれ一機、三機、二機の飛来を確認できますが、これは前二日が東京市街地、二九日が横浜市街地が第一目標です。

これを機会に、機雷投下と併行しながら、もういちど大都市とその周辺の航空機関連工場が目標になっていきます。沖縄支援作戦の間に復興した施設の破壊が狙いだったのかもしれません。

十一九四五年六月の空襲

六月九日、一〇日も投弾の記録がありますが、この両日も広範囲の軍需工場が第一目標になっています。そして、六月一八日を迎えます。

先に述べたとおり、米軍には英本土航空戦等の戦訓もあって、都市への焼夷攻撃の有効性を支持する人たちがいました。そのなかで最も目立った活動をしたのがルメイという

ことになります。

焼夷弾の開発一つとってみても、ルメイの思いつき一つで攻撃方法が変わったわけではありません。浜松等の地方都市空襲についても、ルメイが「大都市は終わったから次は地方都市だ!」と思いついたのではありません。

米軍は、マリアナ諸島占領の後すぐに、日本空襲の際に攻撃する都市の一覧を作成しています。そして、その攻撃方法も単純に東京空襲の縮小版として実施されたのではないのです。

実は、小さい都市ほど、たくさんの焼夷弾を落としています。人口に対しての焼夷弾の投下率は、浜松の方が東京などよりも多いのです。浜松や静岡レベルでは、市民一人に対しておおよそ筒を二本落としています。ですから、もう消火ができるはずもない状態です。

なぜかという、焼夷弾は、延焼効果、つまり火事を起こすことによってその街を丸ごと焼いてしまうのが目的なので、東京のように密集地帯がたくさんあると、火災が火災を呼ぶという形になりますが、浜松のような小さい地方都市では投弾場所が限られることから、一度に焼いてしまわないと、もう二度と焼けなくなってしまう。そのため、小さい都市ほど高密度に焼夷弾を投下するよう計画されたのです。

焼夷弾一つ一つの割合で考えると、都市人口一人に対して一・八筒の焼夷弾を投下するのを平均としています。同時に、圧縮度も高い目標が設定されています。つまりは、単機侵入が原則であっても、前後のB 29とは至近距離で侵入し、一瞬で通り過ぎる目標に向かって焼夷弾を投下し、それぞれマリアナまで帰投しなくてはならないわけです。

実際には、F 13かB 29による天候観測機が実際の爆撃の直前に状況確認し、一ウイング一二〇機程度のB 29が、浜松の場合は六六分、静岡の場合は一二三分、清水が九七分、沼津が九九分、一機ずつ投弾していきます。浜松では三〇秒に一機、静岡では一分に一機の割合での投弾ということになります。

静岡空襲の場合は、藤枝監視哨で一機ずつ把握して記載していますが、もう少し間隔があるように感じます。圧縮度は、目標値に近いように都合よく報告されているのかもしれない。最初の数機は、ベテランレーダー手・爆撃手が乗り込んで、目標点（浜松は板屋町交差点、静岡は本通りと静銀本店前）に焼夷弾を投下し、残りのB 29はその火に向かって焼夷弾を投下したのです。

投下された側では、浜松でも静岡でも、「周囲から火をつけて逃げ道をふさいだ」「上空からガソリンをまいて火災をおおった」と体験者の話がありますが、収束焼夷弾をその

ように意図的に散布はできないし、火災発生のもと上空からガソリンを撒いたら自機が被災しますから、そのような事実はありません。

しかし、結果として次々やってくるB 29は狭い市街地に次々投弾して去りますから、火災が不規則に起きて、そのような印象を与え、次々投下された収束焼夷弾がバラバラになる時や地上に落ちての火炎放射の際には、油脂類は飛び散ったと思われます。

なお、県内では沼津が小型ながら火炎放射力の強い焼夷弾が数多く投下されており、焼夷率も高くなっています。

当時は、焼夷弾は投下の際には防空壕で待機し、その後消火作業を行うよう訓練がなされていました。浜松・静岡では、ふみとどまって焼死した方や、防空壕を信じて窒息された方も多いようです。

静岡市に救援活動に入った人を中心に、惨状を目にした清水の人たちは、逃げるのを優先したために、静岡約二〇〇〇人、清水約三五〇人と、その犠牲者数に大きな開きが出たとされています。

私はそのほかに、本土決戦部隊が築城した陣地への避難を許さなかったという証言に注目しています。艦砲射撃の時は許されたとあり、具体的ですから、そのとおりなのでしょう。防諜という観点もあるのですが、軍民一帯と

なった本土決戦など、最初から計画されてないなかったのです。

浜松空襲で亡くなった方は、約三五〇〇人といわれます。戸籍に登録されないまま亡くなった乳児や、たまたま浜松にきていて亡くなった方もいらっしやるでしょうから、正確な数の把握は非常に難しいものがあります。

一人一人がかげがえのない命を落としているのですから、一人一人が確認されていく必要があるでしょう。焼夷弾の雨の中を油脂を浴びながら逃げた体験を語ることのできる人がいらっしやるうちに、その作業は行われる必要があると感じます。

一九四五年七月・八月の空襲

さて、その後も浜松には数機ずつ投弾していくB 29がいます。B 24やF 13がお昼頃にやってくるのも日常化し、三日に一度は深夜に空襲警報が出ます。

そして、七月一六日の沼津空襲以後は、マリアナのB 29・F 13、硫黄島のB 24、七月二四日からは空母艦載機による戦術攻撃が重なっていきます。

七月二四日、二五日、三〇日などは、日中空襲警報が出っ放しという状況です。

そして、七月二六日一機のB 29が八時五分に将監町に、

一発で四トンの重さのある、超大型爆弾を投下しています。そのほかに、島田と焼津にも投下され、島田では市街地に落ちて大きな被害ができました。

原子爆弾と同じ形状・同じ重さのもので、原子爆弾の投下訓練でありました。このような状況を、枝村三郎氏は「混爆」と表現しています。被害者からみた視点としては、そのような印象であつたと思います。

七月二九日の艦砲射撃は、英軍のキングジョージ五世を含めた、米英連合の戦艦・巡洋艦による艦砲射撃のあつた日です。すでに浜松は焼け野原で、ルメイは海軍に戦果を横取りされるのを恐れて、浜松はすでに灰であることを示して抗議したといわれます。

清水でも浜松でも、終わりがはっきりわからない艦砲射撃は、砲弾の着弾音や震動も含め、非常に怖いものであつたと記憶されています。

清水の事例は、渡辺晴男氏が米駆逐艦乗員だった人とメール交換をして、一艦一艦の射撃のようすを復元しています。米軍の記録では五分、渡辺氏の復元では一〇分の砲撃でしたが、清水市民の感想はおよそ三〇分との記載が多く、恐怖による時間感覚のずれであろうと思われます。

米軍資料による最後の浜松空襲は、八月一日です。その日は、八王子・富山・長岡・水戸が各ウイングの攻撃目標

です。しかし、八月七日には都田で空襲を受けた記載があります。その日は豊川海軍工廠が第一目標ですので、その関係なのでしょう。

おわりに

浜松の戦争遺跡を考えるうえで、浜松空襲は避けて通れないことから、この話題を取り上げました。馬込川にかかる橋に弾痕が残っている場合がありますが、「これが浜松空襲の痕なのだ」という理解になるか、「これが何月何日の空襲で、市民何人の命を奪った空襲の痕なのだ」という理解になるか、さらに「これが何月何日何時何分に、〇〇さんの命を奪った空襲の痕なのだ」と表現できるのかによって、戦争遺跡の持つ意味は違ってくるように感じます。

詳細になっていく歴史研究の行方が、単なる正確さの追求や、マニア的な関心を充足するものではなく、人の命を前にしての、平和のための戦争理解というかたちで進んでいく必要があると思います。

今日は細かいお話をしました。不思議なことに、私の家族親族で、戦争で亡くなった人はいません。

母方の祖父は中部電力に勤めていて電気工事等ができた人でした。そのような人が優先的に徴兵されるので、中国

戦線に三度も召集されました。最後は四二歳で行って、「もうおれは帰ってこん」という話をして行ったそうです。負傷して寧丸の一つをなくしましたが、何とか生きて帰ってきました。

父方の祖父は、指物もする大工でしたが、身長が一四八センチメートルで、徴兵の身長が一五〇センチメートルからでしたので、それで応召を免れました。ただ、中島飛行機に徴用でとられて飛行機の増加タンクをつくり、空襲を受けましたが、生き残りました。

私が生まれ育った家は、昭和七年に父方の祖父が自分で建てたのですが、中島町にありながら空襲も艦砲射撃にも生き残り、現在も建っています。この家も実は戦争遺跡で、機銃掃射を受けて壁に穴が開いた跡があります。

母は半田町で生まれ育ちました。浜松大空襲の夜に祖母は肋膜炎で動けず、国民学校三年生だった母は伯父とともに叔母を背負い、もう一人の叔母の手を引き、台地上に逃げました。幸い半田町はその日は被災しませんでした。空襲・戦争を嫌悪しています。

戦争は、死者を出さなくても、人の心に傷を残します。戦争はいやだという気持ちがある以上、戦争を体験した人の気持ちレベルまで実証できる詳細な研究が必要だと感じています。

最後に、「夕闇がさまった空に、敵機がとんでくる。味方の高射砲は高空を飛ぶ敵機には届かない。われわれは憎しみをもって、敵機をにらむほかはない」と記した人がいます。記したのは、中国の詩人で場所は重慶。重慶は一九三八年から一九四一年まで、冬の時期は霧にかけられるといえ、特別編成の日本軍戦略爆撃部隊の空襲を受けたのです。その部隊の用法は、浜松陸軍飛行学校で研究され、浜松の飛行第七聯隊の一部が母体となって編成されたこと、そして、浜松市民は、無意識・間接的とはいえ、それを支えた事実があることも、記憶されなくてはならないでしょう。

参考文献

- 山本七平『一下級将校の見た帝国陸軍』朝日新聞社、一九七六年
- 浜松空襲・戦災を記録する会『浜松大空襲』一九七三年
- 奥住喜重『中小都市空襲』三省堂、一九八八年
- 静岡県『静岡県史資料編20 近現代5』一九九三年
- 小山仁示『米軍資料日本空襲の全容』東方出版、一九九五年

平塚征緒『米軍が記録した日本空襲』草思社、一九九五年

浜松市立中央図書館『浜松市戦災史資料』一、四、一九九五

）一九九九年

竹内康人『浜松の戦争史跡』人権平和・浜松、二〇〇五年

阿部聖『米軍資料から見た浜松空襲』（愛知大学総合郷土研

究所ブックレット12）二〇〇六年

竹内康人『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』人権平和・

浜松、二〇〇七年

※藤枝防空監視哨の記録をもとに、警戒警報・空襲警報の発令・解除を一覧化した表を資料にしましたが、二〇一〇年三月刊行予定の『藤枝市史研究』に掲載の予定です。詳細を確認されたい方はご覧ください。

浜松の戦争遺跡

竹内康人

この公開講座の第一回では、荒川先生が浜松と軍隊の歴史についてお話しになったと思います。第二回では、村瀬先生が浜松の空襲の話を防空監視哨の資料を使いながら細かく話されたと思います。

第三回となる今回は「浜松の戦争遺跡」というテーマですが、第一回で軍隊、第二回で空襲の話をしたということは、浜松の戦争遺跡を考える意味で、主要な視点が二つ出されたことになります。

というのは、浜松の戦争遺跡は大きく二つに分けられるからです。一つは軍事施設の遺跡、もう一つは空襲関係の遺跡です。そして、その二つの死者を追悼する形で、さまざまな碑も残っています。

ここでは、これまでの話をふまえて、「浜松の戦争遺跡」というテーマで話をしたいと思います。最初に、「戦争遺跡

とは何か」という全般的な話をし、浜松の歴史と戦争遺跡の具体的な状況を紹介し、日本や世界でどのように戦争が語り伝えられているのか、戦争遺跡の意義とは何か、の順に話したいと思います。

戦争遺跡の定義

まず、戦争遺跡をどのように定義するのかについてみてみます。何をもって「戦争遺跡」というのかですが、戦争遺跡保存全国ネットワークという団体は、「近代日本の侵略戦争と、その遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗にかかわって、国内外で形成された、かつ現在残された構造物や遺構や跡地」と定義しています。

ここでいう戦争遺跡は「近代日本」のものを指しています。

たとえば、武田信玄と徳川家康が戦った三方原も戦争遺跡ではないかといわれる方もいるかもしれませんが、ここでは、近代日本の戦争に絞って考えているわけです。

では、戦争遺跡にはどのような種類があるのでしょうか。『しらべる戦争遺跡の事典』という本では次のようにまとめています。

政治・行政関係…陸軍省、師団司令部、陸軍病院、陸軍学校、研究所等
軍事・防衛関係…要塞、陣地、飛行場、演習場、通信所、退避壕、掩体壕等
生産関係…軍需工場等
戦闘地・戦場関係…空襲被災地、原爆被爆地、その他戦闘が行われた地域等
居住地関係…捕虜収容所、外国人強制連行労働者居住地、防空壕等
埋葬関係…陸海軍墓地、捕虜墓地、忠魂碑
交通関係…軍用鉄道・軌道、軍用道路
その他…慰安所、奉安殿、学童疎開所

また、「戦争遺物」という概念もあります。戦争遺跡の発掘調査では、たとえば兵器類、軍用品、日用品、建築資材、

工具、電気器具など、いろいろなものが出土しますから、それらを「戦争遺物」として位置づけます。

↑戦争遺跡を知るための資料

戦争遺跡を知るための資料としてよく使われるのは、陸海軍の文書です。これは防衛省の図書館、防衛研究所にあります。

また、アメリカ戦略爆撃調査団の資料があります。この調査団は英文で United States Strategic Bombing Survey といい、これを略して USSBS といいます。現物はアメリカの国立公文書館にあります。主なものは国立国会図書館にもあります。ピースおおさか(大阪国際平和センター)にも米軍関係資料があります。

『静岡県史』や『浜松市史』のような自治体史も参考になります。また、地図や空中写真、さらには聞き取りや証言なども、戦争遺跡の調査では重要な資料になります。

戦争の歴史と浜松

↑陸軍歩兵基地から陸軍航空基地へ

浜松には一九〇七年に陸軍の歩兵第六七連隊が置かれていたのですが、一九二〇年代の軍事の近代化のなかで、陸

軍の飛行機の部隊が置かれます。陸軍の飛行第七連隊が一九二六年に東京の立川から飛来したわけです。会場の静岡大学浜松キャンパスがある場所には高射砲部隊が置かれました。

この飛行第七連隊から、戦争のたびに次々と中国大陆に派兵されます。派兵先でさらに増強し、中国各地で爆撃をくりかえすわけです。派兵された部隊の名前は、最初は飛行第七大隊第三中隊であったのですが、それが大きくなつて第十二大隊、さらに第十二連隊になり、日中戦争になると、第十二戦隊へと名前が変わります。この第十二戦隊から、さらに多くの部隊が編成されていくわけです。つまり、浜松を出発点にして中国大陆に行き、中国大陆で増強されて、そこから次々に増殖して部隊が生まれて行くのです。

浜松からの部隊は台湾にも、中国の「満州」にも行きます。「満州」に行った部隊が、中国北部から中国全体に行動範囲を広げ、そしてアジア太平洋戦争が始まると、シンガポール、マレーシア、インドネシアにも派兵されるという形で、爆撃部隊は行動し、部隊を増殖させていくわけです。このような爆撃部隊の起点になっているのが、浜松なのです。

十軍都浜松

浜松は、爆撃の拠点となっていただけでなく、プロペラ

やエンジンを生産する軍需工場を中心に多くの工場があり、軍需生産の地でした。日本楽器では飛行機のプロペラを作り、中島飛行機ではエンジンを製造しました。さらに、飛行機関連のさまざまな部品を、浜松の小さな軍需工場がたくさん作っていました。鈴木織機では砲弾などを作っています。

もともとは平和的なものを作っていた工場が、一九三〇年代後半から、徐々に軍需工場へと再編されています。

浜松陸軍飛行学校では毒ガス戦の研究も行われていました。戦後すぐに浜名湖に毒ガス缶を捨てて隠しています。その後、毒ガス缶が浮かんできて、触れて亡くなった方もいます。最近でも、浜名湖周辺の山林で毒ガスの缶が見つかっています。

毒ガスで最も重要視されたのはイペリットです。このガスは吸引すると、血を吐いて苦しみながら死んでいくという糜烂性のものです。そのイペリットをどのように飛行機で使うのかという研究をしていました。イペリットとルイサイトというガスを混合することもありました。

これを飛行機から爆弾で落としたり、空から撒いたりします。雨のように撒くので、「雨下」といいます。浜松では爆撃機による毒ガスの投下と雨下の訓練をしていたのです。この毒ガスを日本軍は実際に中国大陆で使用しています。

しかしその実態は今も明らかになっていません。なぜかというところ、毒ガスを使うことは戦争犯罪だからです。もちろん、そもそも戦争そのものが戦争犯罪であるという考え方もできますが、ここでは、たとえば捕虜を殺す、一般住民を殺す、毒ガス兵器や細菌兵器を使うなどといった、戦争中でもやってはいけない行為を指します。その戦争犯罪を中国大陸で行っていますから、その実態は今も隠されたままということなのです。

一九四四年には、浜松の三方原を拠点にして、三方原教導飛行団という毒ガス戦用の独自部隊も編成されました。

話をまとめますと、浜松は陸軍の歩兵連隊から陸軍の爆撃の拠点になり、高射砲部隊が置かれ、さらに毒ガスの航空戦部隊も置かれたということです。戦争末期には、特攻戦部隊が編成され、各地に本土決戦の部隊も置かれました。そして戦後は、航空自衛隊浜松基地になる。浜松にはこのような軍事の歴史があるわけです。

↑基地建設での朝鮮人労働

図1は航空自衛隊浜松基地の弾薬庫の写真です。この浜松基地には、戦争遺跡がいくつか残っています。飛行学校時代の部隊の建物や弾薬庫、衛兵の詰所もあります。戦争末期に建てられた地下戦闘指揮所の建物も残っています。

この浜松基地の前身となった陸軍飛行第七連隊の飛行場建設にあたっては、朝鮮半島から渡ってきた人々も従事しています。図2は当時の新聞です。「飛行隊工事に従事の鮮人」という見出しがみえますが、この「鮮人」とは朝鮮出身者のことです。記事では、「三方ヶ原飛行隊工事の請負の大倉組では目下六百名の土工を使用して居るがそのうち内地人は四百名鮮人二百名」と書いてあります。多くの人々が動員され、飛行場が造成されたという歴史があるわけです。

↑浜松からの爆撃隊

このような工事によってできた飛行部隊は、一九三一年の「満州」での戦争以降、中国各地で爆撃を行っています。図3は、一九三三年の熱河作戦の時に、飛行機から爆弾を



図1 西山 航空自衛隊浜松基地 弾薬庫

落としている写真です。写真には投下した爆弾も写っています。図4は、北京周辺の密雲を爆撃したときの写真です。小さな爆弾をたくさん落としています。このころから無差別爆撃をしています。これらの爆撃は、浜松から「満州」に派兵されていた飛行第十二大隊によるものです。

ゲルニカや重慶の無差別爆撃のことはよく知られています。いろいろな資料を見てみると、実は一九三〇年代の早いころから市街地の無差別爆撃をしています。

一九三七年に日中戦争



図2 『静岡新報』1926年10月29日



図3 熱河作戦での爆弾投下（飛行第一二大隊『満州事変記念写真帖』）

が始まりますが、この時にも浜松の部隊が中国に派兵されています。浜松からは重爆撃隊と軽爆撃隊が両方出て行きます。それらは現地で強化されて、飛行第六十戦隊、飛行第九八戦隊、飛行第三一戦隊などという名前になり、その後アジア各地に派兵され、爆撃をおこないます。

図5は防衛省図書館にある写真ですが、洛陽の市街を爆撃しているところです。図6はマレーシアのパナン島の港を爆撃している写真です。写真の欄外に「60 F」



図4 北京・密雲への爆撃（飛行第一二大隊『満州事変記念写真帖』）

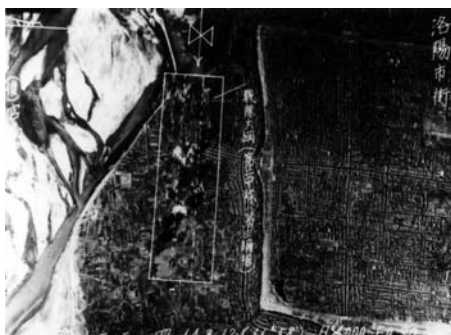


図5 洛陽への爆撃（『飛行第一二戦隊（重爆）中国要地爆撃写真集』）

と書いてありますが、これは「六十戦隊」という意味です。浜松から出て行った部隊が強化されて飛行第六十戦隊となり、アジア太平洋戦争にともないマレーシアの島を爆撃したというわけです。

つまり浜松の歴史をみると、浜松が空襲を受ける前に、浜松の基地から出撃してアジア各地を爆撃したことがわかります。これらの写真は、そのような歴史をしめす証拠です。

↑浜松からの爆撃／浜松への爆撃

私は浜松の軍事の歴史を調べるなかで、浜松の空襲について記す前にアジアでの爆撃について調べたいと思いました。なぜかという、浜松に飛行部隊があり、その部隊が

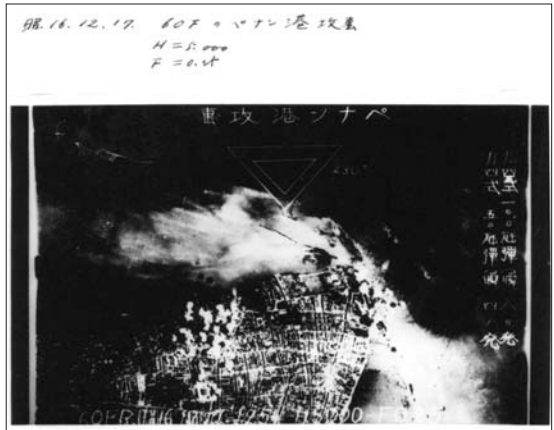


図6 パナン爆撃（『南西進攻60F参考写真集』）

中国を爆撃したということを聞いたことがあり、被害の前の加害の歴史に関心を持ったからです。しかし当時は、その飛行部隊が何をやったのか、まったく知りませんでした。そのような部隊があるのなら調べてみようと思って調べ始めました。

調べてみると、戦隊史がいくつか出版されていることがわかりました。有名な戦隊が、先ほどの飛行第六十戦隊ですが、この六十戦隊の戦隊史を古本屋で手に入れて読み始めたところ、予想以上にアジア各地を爆撃していることがわかりました。他の戦隊史をみると、マレーシア、シンガポール、さらにインドにまで爆撃に行っていることを知りました。

このような歴史を知る中で、浜松から出て行った部隊がアジアで何をしたのかということを知ることの重要性を再認識したわけです。

さて、そのうえで浜松の空襲についても調べてみました。調べてみると、いろいろな写真が



図7 艦砲射撃調査隊報告書

出てきました。

図7はそのうちの一枚です。これは、アメリカ海軍がイギリス海軍と一緒に艦砲射撃をした後の、艦砲射撃調査隊の報告書です。下に「HAMAMATSU」と書いてありますが、浜松の市街地が空襲と艦砲で攻撃されて破壊された後の写真です。図8も浜松市内の状況です。

浜松の戦争遺跡

↑浜松の戦争遺跡の分類

さて、ここからが本題の浜松の戦争遺跡についての話です。私は浜松の戦争遺跡を次の五つに分類しています。

①陸軍航空基地関係



図8 浜松市内の破壊状況（艦砲射撃調査隊報告書）

②浜松空襲関係

③「本土決戦」関係

④戦争死者追悼碑

⑤強制労働跡地

このうち①と②が主要な遺跡調査の対象になります。⑤については、日本通運浜松支店や鈴木織機、天竜の久根鉾山や峰之沢鉾山に朝鮮半島から一〇〇〇人を超える朝鮮人が連行されています。峰之沢鉾山へは中国人も連行されました。また、学徒動員などでも多くの人々が軍需工場に動員されました。そのような跡地も調査の対象になります。

↑米軍史料から見る浜松空襲

最初に、アメリカ軍の史料から浜松空襲について見ていきたいと思っています。図9は、アメリカの戦略爆撃調査団の資料で、国立国会図書館に所蔵されています。爆撃目標に関する資料ですが、これを見ると、静岡県が中央で二つに分けられています。図の中の「90・21」という番号は浜松地区を示しています。この地区には豊橋も入っていますから、アメリカ軍にとっては、浜松も豊橋も同じ浜松エリアだったということが分かります。

図10には浜松を中心に円がいくつも描かれています。

この円の中心になっっているのは日本楽器のプロペラ工場です。市内にある日本楽器が主な攻撃目標だったのです。図11は、浜松の市街地を拡大した地図ですが、鈴木織機、国鉄工機部、中島飛行機などの工場や陸軍の飛行場も含まれています。軍需工場や軍事施設がアメリカ軍のターゲットであったわけですね。

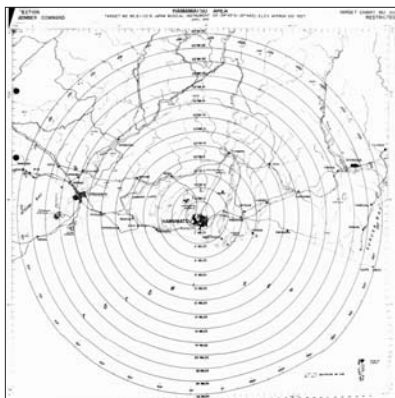


図10 攻撃目標地図

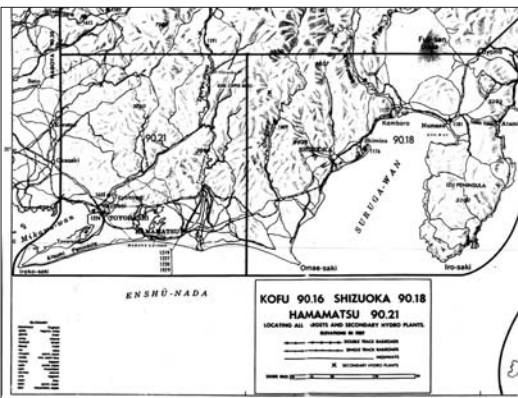


図9 目標情報 90は日本、21は浜松を示す



図12 浜松北部の写真

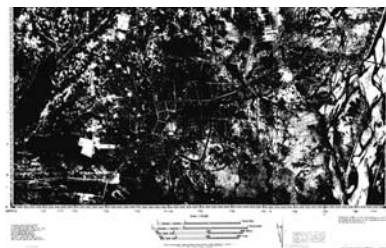


図13 浜松南部の写真

われる爆撃用の地図です。このような爆撃用の地図を作るために、偵察機で空から写真を撮ります。それを参考に地図を作り、パイロットに渡して、爆撃目標を指定し、実際に爆撃するわけです。

このような爆撃用地図を作るために、アメリカ軍は日本のいろいろな地図を集めて研究しています。図15もアメリカ

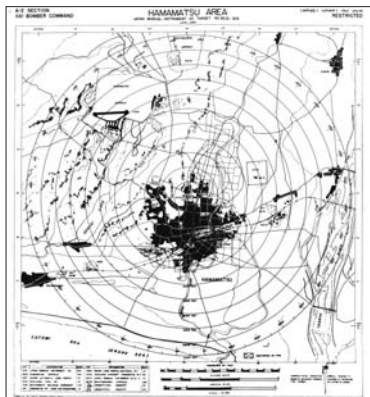


図11 攻撃目標地図

カ軍が集めた地図から作成されたものの一つで、浜名湖周辺の地図です。図16・17は浜松市内の地図ですが、英文で表記されています。

図18は、ターゲットの情報を書き込んだシートで、日本楽器でのプロペラ生産の詳細が記されています。「TARGET

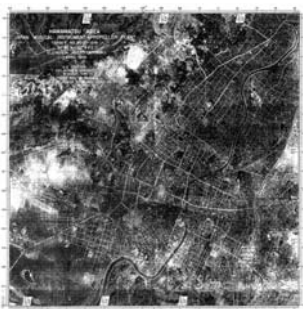


図14 浜松攻撃用のリトモザイク



図15 浜名湖周辺地図

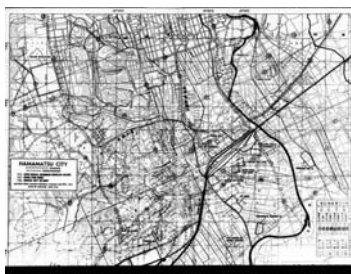


図16 浜松市内地図



図17 浜松市内地図

1219」とありますから、このようなシートがたくさん作られていたわけです。図19は、「艦載機戦闘報告書」という資料の中にあるものです。空母から出撃した艦載機が浜松の飛行場をどのように爆撃したかを記した報告書に含まれている地図です。

図20～25は、艦載機による浜松基地とその周辺の航空写真です。特に図23からは、地上に飛行機を隠すための掩体が多く作られていることが分かります。図26は、損害評価報告（「DAMAGE ASSESSMENT REPORT」）の写真です。これは浜松の基地を爆撃してどのくらいのダメージを与えたのかということを調査し、報告したものです。



図18 ターゲットシート



図19 浜松・三方原の軍事基地攻撃地図（艦載機戦闘報告書）

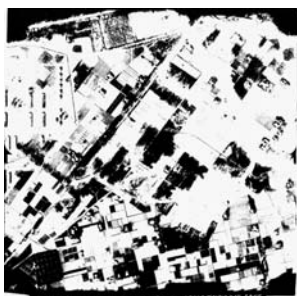


図22 艦載機航空写真



図21 艦載機航空写真



図20 艦載機航空写真

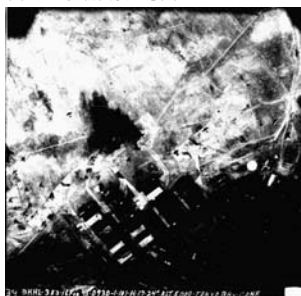


図25 艦載機航空写真



図24 艦載機航空写真



図23 艦載機航空写真

図30は中島飛行機の浜松工場です。図31は浅野重工業、図32は日本楽器天竜工場です。浜松の工業地帯ではプロペラとエンジンという二つの主要部品が作られ、飛行機関連の

図27は日本楽器の爆撃目標標票です。図28はその日本楽器を爆撃した時の写真で、爆撃による煙が写されています。図29の写真は浜松市内の空爆後の状況を示すものです。白くなっている部分が空爆され焼失した所です。繰り返し返される空襲によって、三五〇〇人を超える市民が命を失いました。

図27は日本楽器の爆撃目標標票です。図28はその日本楽器を爆撃した時の写真で、爆撃による煙が写されています。図29の写真は浜松市内の空爆後の状況を示すものです。白くなっている部分が空爆され焼失した所です。繰り返し返される空襲によって、三五〇〇人を超える市民が命を失いました。

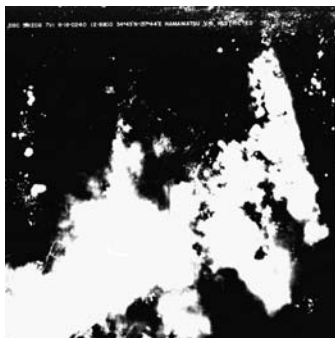


図28 日本楽器への爆撃写真



図27 日本楽器の爆撃目標



図26 浜松飛行場への攻撃・損害評価写真



図31 浅野重工業



図30 中島飛行機浜松工場



図29 空爆後の浜松市街



図34 新居海兵団・舞阪鉄橋



図33 和地倉庫



図32 日本楽器天竜工場

部品や工作機械などを製造していた工場も多く、そのために爆撃の目標になったわけです。さらに夜間の市街地への無差別爆撃や艦砲攻撃もおこなわれました。

図33は和地の地下壕の写真です。図34は新居・舞阪の付近ですが、新居には海兵団が置かれていました。図35は天竜の飛行場です。

図36・37は先ほど紹介した爆撃の損害評価の写真で、浜松市街地のものです。このような写真から、どれだけ被害を与えたのかを示す損害評価の地図が作成されました。その地図が図38です。ここでは、六・一八浜松空襲によって被害を与えたエリアを斜線で示しています。黒塗りのエリアは、六・一八の浜松空襲より前に破壊されていた区域で



図37 損害評価写真



図36 損害評価写真



図35 天竜飛行場

す。

ここで紹介してきた写真の多くは、アメリカの国立公文書館にある戦略爆撃調査団の資料を日本の国会図書館が収集したものです。また、戦略爆撃調査団の資料から浜松関係の資料を収集したものが、浜松市立中央図書館にあります。

次に、浜松の戦争遺跡の写真を紹介していきます。冒頭でもお話ししましたが、浜松の戦争遺跡を考えるとときには、浜松から飛び立った部隊がアジアで何をしたのかという加害の歴史を踏まえる必要があると考えています。そこで、浜松の話の前に、浜松から派兵された部隊が西安の市街を爆撃した写真を紹介しておきます（図39）。



図38 浜松市街地の損害評価地図



図39 西安への爆撃（「飛行第一二戦隊中国要地爆撃写真帳」）

写真でみる浜松の戦争遺跡

十浜松三方原の陸軍航空関係史料さて、浜松の戦争遺跡の事例に入ります。

図40は浜松基地に向かう道路沿いにあるトーチカです。トーチカとは、機関銃や砲などを備えたコンクリート製の堅固な小型防御陣地のことです。

三方原には、赤松鳥居という鳥居があります。この赤松鳥居は、戦争中に陸軍が「敵の目標になる」といって撤去してしまっただけですが、西山の航空自衛隊に保管されていた浄水盤と道標を一九七八年に元のところに戻して復元しました。その由来を記した説明板の写真が図41です。

図42は、三方原教導飛行団



図40 半田・トーチカ



図41 赤松鳥居の説明板

跡にあった貯水槽の跡です。毒ガス部隊の痕跡だったので、最近消滅してしまいました。

図43は三方原教導飛行団の跡地にある門柱ですが、当時の門柱かどうかはよく分かりません。三方原教導飛行団の跡地には現在自衛隊の官舎があります。浜松工業高校の近くです。

図44も浜松工業高校の近くですが、三方原教導飛行団の南側に第七航空教育隊（中部第九七部隊）がありました。これは整備教育の部隊ですが、この部隊の敷地には排水路が掘られています。この排水路も戦争遺跡の一つとていいと思います。

図45の碑も三方原にあります。これは「四勇士碑」といいます。一九三七年三月一日、四人乗りの九三重爆撃機が爆撃演習中にエンジン事故



図42 東三方・貯水槽跡（消滅）



図43 東三方・三方原教導飛行団跡

で墜落し、その事故で亡くなった部隊員を追悼した碑です。

住吉の青少年の家の前の公園には陸軍墓地がありました。図46は陸軍墓地の跡です。ここにあった「忠霊殿」という建物は近年破壊されました。忠霊殿は一九四三年に戦争死者の遺骨を一時安置する場所として陸軍省によって建設されました。これまで遺族会が借用する形で管理してきましたが、老朽化によって取り壊されました。

また、この中にあった一万人余りの位牌は二〇〇五年三月に処分を強いられました。墓地には「陸軍用地」の石柱が残っ



図44 初生・第7航空教育隊の排水溝



図45 三方原・「四勇士」の碑



図46 住吉・陸軍墓地跡

ています(図47)。図48も陸軍用地の石柱ですが、これは鹿谷にあった憲兵隊の跡地に残っているものです。

図49は浜松基地の中にある地下司令部跡です。図50は浜松工業高校の近くにある貯水関係の施設で「長池」と呼ばれています。

一九三九年ころに掘られました。軍事基地は保水ができたため、流出する水を貯める施設が必要になり、貯めた水を段子川に流すための水路が作られたわけです。この工事現場には朝鮮人の労働者も働いていたという証言があります。

↑浜松の陸軍航空部隊と毒ガス戦

図51は、広島県の大久野島の毒ガス資料館に展示されている毒ガスの容器です。「きい剤容器」と書いてあります。「きい剤」とは、イペリットや、イペリットとルイサイトを混



図49 西山・浜松基地の地下施設



図48 鹿谷・憲兵隊跡地の石柱



図47 住吉・陸軍墓地の石柱

合したもので糜烂性の毒ガス兵器です。戦争が終わるとすぐに、浜松では隠蔽のためにこのような容器を浜名湖に捨てました。

この「きい剤」は中国大陸にたくさん運ばれ、実戦で使用されています。日本軍の資料では、空からばら撒くという「雨下」はしないとしていますから、

他は許可されているわけです。普通の爆弾を投下して、その中に混ぜて使用するというやり方ならいいというような考え方もあったといえます。その実態はよく分かりません。中国側の資料には、日本機がやって来て毒ガス弾を投下したという記事があります。

細菌も兵器としても使用されました。細菌が実際に使われたという中国側の証言をもとに調査したところ、実際に使用していたことが分かり、被害者が日本政府に



図51 大久野島(広島県)の毒ガス容器



図50 初生・長池

対して損害賠償を求める裁判を起こしたのが一九九〇年代半ばです。参謀の資料の中に細菌兵器の使用の記述があり、現地調査で被害者側の証言が一致し、その使用や被害の状況が分かり、その被害を認定させ賠償させようという動きになったわけです。それは、戦争が終わって五〇年がたった段階のことです。戦争犯罪である毒ガス戦や細菌戦に関する戦後補償の問題はまだ終わってはいないのです。

では、陸軍の毒ガスがどこで製造されたのかというと、広島県の大久野島です。毒ガスを缶に入れ、列車に乗せて各地に運んでいくわけです。この「きい剤」が浜松にあったことは事実です。もともと飛行学校には毒ガス関連の部隊が置かれていました。三方原教導飛行団はそれが分離独立したものであり、本土決戦時に毒ガスを使う実戦部隊であつたわけですね。毒ガスを使つての訓練もおこなわれていました。浜松陸軍飛行学校は「満州」でも毒ガス使用の訓練をおこなっています。

戦後、毒ガスは浜名湖に捨てられたのですが、その後、遠州灘に再投棄されました。中国に運ばれた毒ガスの多くは現地に残されたままです。チチハルなどでの戦後の毒ガスによる被害も遺棄毒ガスによるものです。

↑ 浜松からの爆撃

図52は浜松の陸軍飛行学校時の建物を利用した浜松基地の資料館です。この資料館には、シンガポール爆撃の時に佐藤重由中尉が使用した地図が展示されていました。佐藤重由という人は、飛行第六十戦隊の中隊長です。私はそれを見て、アジア侵略の視点で

浜松の歴史をもう一度捉え直さなければならぬと思います。地域の歴史を調べ直して、浜松から出て行った部隊がアジアで何をやったのかということを調べ、そのうえで浜松の空襲の歴史を調べたいという思いを強くしたのです。

図53は、飛行第七連隊の門柱を利用した碑です。



図52 浜松基地の資料館



図53 陸軍爆撃隊発祥之地



図54 碑文

門柱に「陸軍爆撃隊発祥之地」と刻んであります。この碑は浜松基地の資料館の前にあります。横には歴史を記した碑があり、その一部が図54ですが、ここには浜松からの部隊がアジア各地を爆撃したことが記されています。

さらに注目すべきは「戦略爆撃」を「敢行」と、はっきりと書いていることです。戦略爆撃とは、後方の主要軍事施設や生産施設、物資貯蔵所、交通網や住民を爆撃することにより、相手の戦意を低下させて降伏させようとする攻撃です。重慶や蘭州などへの戦略爆撃が行われていますが、この碑を建てた一九六〇年代の段階で、当時の日本の陸軍がやった行為が肯定的に語られているという点を見逃してはいけません。

歴史を見ていくときには、爆撃の下にいた人々がどのような気持ちだったのかという視点でとらえることが必要だと思います。先ほど見た米軍の爆撃の評価用の写真でも、その下にいた市民がいったいどのような状況になったのかという視点が大切です。米軍の「戦果」の数値を見るために、私たちは歴史を学んでいるわけではないのです。落とされた側の気持ちはどうなのか、爆撃されるなかでアジアの人々がどのような思いでいたのかが大切です。そのような思いを踏まえながら、浜松の空襲を見つめ直すという作業が必要だと私は考えています。

基地資料館の展示にある浜松から出撃した特攻隊員の遺書には、「大君の御楯」となって、「尽忠報国」し、「必勝の信念」

を持つという気持ちで記されています。人間をこのように命を否定する存在へと追い込んでいった歴史のありようを問うべきです。同様に多くの人が死を強いられたと思います。二二〇万人の兵士、一〇〇万人といわれる市民、あわせて三一〇万人という日本人が、なぜそのような死を強いられたのか、これから死を強いられない環境をどのように構築していけるのか、攻撃を受けた側のアジアの人々はどういう状況になったのか、平和と友好には何が必要なのかという問いは、平和への出発点であると思います。

十 浜松駅周辺の戦争遺跡

図56は、浜松城公園にある「帰国記念植樹」碑で、一九五九年に建てられました。浜松城天守閣のすぐ横にあります。「朝日両国永久親善万歳 朝鮮民主主義人民共和国帰国記念植樹 在浜松朝鮮公民一同」と記されています。三方原での陸軍飛行場建設の頃には多くの朝鮮人が来



図55 沖縄戦特攻・義烈空挺隊（『飛行第60戦隊史』）

ていました。戦時期には強制労働をさせられた人もいたのですが、多くは仕事を求めて浜松にきた人々でした。一九五〇年代の中頃から帰国事業が始まります。一九四八年に南北が分断されて、一九五〇年に朝鮮戦争になり、一九五三年に朝鮮戦争が停戦しますから、この碑は停戦から数年後に建てられたことになります。

朝鮮認識は近年「拉致」問題によりだいたい歪んでしまいましたが、朝鮮半島は日本の隣国ですし、朝鮮から漢字や仏教が伝わります。同じ文化圏に属する地域ですから、本来は友好的な関係になるべきです。立場が違い、国が違い、民族が違って、ともに仲良くしていくにはどうすればいいのかということが今後の課題だと思えます。この碑には帰国に際して、親善友好を求めた人々の思いがあると思います。

図 57 は浜松城公園に



図57 松城・浜松空襲死者追悼碑



図56 松城・帰国記念植樹の碑

ある浜松空襲死者の追悼碑です。この碑のうしろには戦災死者三五四九人と人数が刻んであります。実際の死者数はより多いものになるでしょう。人々がお金を出し合って、浜松城公園の一角に碑を建て、平和と追悼への思いを刻んだことは、歴史的な意義があります。

図 58 は静岡銀行の建物です。この建物は戦争中に焼け残りました。復旧して現在も使われています。市内にある戦争遺跡のひとつです。

図 59 は、馬込川の揚子橋に残っている被弾の痕跡です。おそらく機銃射撃による弾痕と考えられます。

図 60 は河合楽器にある追悼の慰霊塔です。河合楽器でもたくさんの方が亡くなりました。碑には死者の名前がなく、だれが亡くなったかを碑からは知ることができません。



図58 田町・静岡銀行浜松支店



図59 楊子橋の被弾の痕跡

浜松市内には空

襲関係の戦争遺跡が各所に残っています。今回の講座では、地域と戦争の実態について、植松の円通寺の被災した門、円通寺の航空兵の墓碑、植松の公園の戦争死亡者の碑と本誠寺の位牌、新町の被爆地蔵などを紹介しながら、解説する予定です。



図60 寺島・河合楽器追悼碑

十浜名湖周辺の戦争遺跡

図61は、浜名湖近くにある左浜の信丘寺の墓碑です。碑文には、「昭和十四年初重慶蘭州等ノ爆撃」と刻まれています。飛行第十二戦隊は一九三九年二月に蘭州を爆撃しますが、その際に三機が撃墜され、部隊員が命を失っています。この碑の人物もその

ときに亡くなりました。この墓碑は浜松を起点とする陸軍部隊による中国での爆撃を示すものです。

図62は浜名湖の

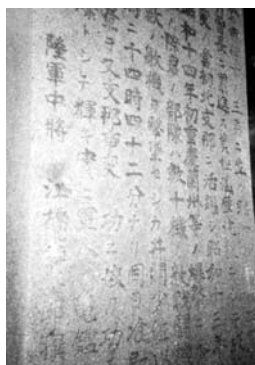


図61 左浜・信丘寺の航空兵の墓碑

鉄橋ですが、ここはアメリカ軍による空爆の対象になりました。この鉄橋を守るために、高射砲部隊が配置されました。数年前、私はここに配属されていた朝鮮人の兵士の方から話を聞きました。その人は今、日本の政府に対して謝罪と賠償を求める韓国人軍人軍属裁判に参加しています。

図63は新居の海兵団に残っている避難壕です。新居の海兵団は艦砲射撃の際にたくさんの方士が亡くなりました。死者の名前は公園にある碑に刻まれています。この壕は新居の海兵団の歴史を語るものです。

十浜松市北区・天竜区の戦争遺跡

図64は、引佐の渋川にある凱旋門です。日露戦争後の一九〇六年に建てられました。この門は建てられてから百年近くになりますが、建設時の面影を残しています。



図63 新居の避難壕



図62 浜名湖鉄橋

図65は、龍山の峰之沢鉱山にある中国人死者を追悼する碑の前での追悼会の写真です。中国から二〇〇人ほ

どが連れて来られて、八一人が亡くなりました。連行される段階でかなり衰弱していて、鉱山に来て強制労働の下で、たくさん亡くなっています。朝鮮半島からも五〇〇人ほど連行されています。

図66は陸軍中野学校二俣分校

校の碑です。ここはゲリラ戦要員の短期育成を目的とした教育機関であり、命を惜しまずに、上官の命令があ



図64 引佐・渋川・凱旋門



図65 龍山・峰之沢鉱山の中国人追悼碑



図66 二俣・陸軍中野学校二俣分校の碑

るまでゲリラ戦をやり抜けと教えていました。小野田寛郎さんもここで教育されました。かれはここでの教えを守り、戦争終了後もゲリラ戦を継続し続けたのです。最近、この部隊の部隊史を手に入れて読んだのですが、一人、名前が消されたままの人がいました。沖繩の久米島は島民や朝鮮人が軍によって虐殺される事件が起きた島ですが、その人は久米島に身分を隠し学校の先生として派遣され、秘密裡に課報活動をしていました。

十地下壕

軍事基地があり、空襲も激しくなりましたから、浜松には多くの地下壕が掘られました。その地下壕の多くは消滅しましたが、残っているものもあります。残っている壕は、市民が隠れた壕もあり、兵士が隠れた壕もあります。図67は、おそらく兵士が隠れた壕だと思います。浜松基地の南方にありました。図68は、高台公民館の近くにある地



図67 和合・浜松基地南方の壕



図68 和合・高台公民館近くの軍地下壕

下壕です。この壕の周辺は塹壕のような形になっています。図69は細江と浜松の間にある根本山の中に残されている壕です。大きな壕であり、山頂からの堅坑と山の横からの壕がつながる構造です。

十「和解」に向けて

図70は、新居にあるアメリカ兵を追悼する碑です。新居の空襲時に米軍機が撃墜されました。この碑の下方には一九四五年七月に墜落して亡くなったアメリカ兵の名前を刻んでいます。神宮寺の住職さんが、アメリカ兵も人間だと言って、戦後に建てたのです。このような碑を作った精神が共有され、

「敵」とされた者同士がどのようにに共同する関係をつくっていきけるのかは、平和への出発点だと思っています。

最近、「和解」



図70 新居・米兵追悼碑



図69 根本山・軍地下壕

という言葉がよく語られます。その前提としては加害行為への謝罪が必要です。加害を見つめ、それから被害を見つめる。戦争の原因をとらえ、戦争への抵抗についてもみながら、命の大切さ、人間の尊厳への視点を基礎に、どのようにに和解と共同をすすめていくのかを考えなければなりません。この碑は、地域における友好と和解のはじまりになる視点を持つ碑ではないか思います。

世界各地の戦争遺跡

最後に、世界各地の戦争遺跡を見てみたいと思います。図71は、フィリピンのマニラ市街にある、マニラ戦の死者を追悼する碑です。一九四五年二月から三月にかけてマニラ戦があり、一〇万人ほどが亡くなっています。アジア太平洋戦争での悲惨な例として、戦後五〇年たってできた碑です。

図72はベトナムの、日本軍支配下でおきた飢餓で亡くなったベトナム人を追悼する碑です。ベトナムでは二〇〇万人の死と言っています。



図71 マニラ戦追悼碑

す。

図73はフィンランドの碑です。フィンランドでは、一九一八年に内戦が起こり、市民同士が殺し合いました。日本では、靖国神社問題のように一九四五年に終結した戦争の評価がいろいろな形で話題になります。

ですが、フィンランドでは一九一八年の内戦問題が議論になるのです。市民同士が対立し、殺し合ったという内戦の歴史は、解決しにくい問題なのだと思います。

図74は、ドイツのベルゲンベルゼンにある強制収容所跡の写真です。ここには五〇〇〇人が埋まっていると記されています。ブルドーザーで死体を集めて埋める映像が残っています。ユダヤ人だけで六〇〇万人が亡



図73 フィンランド内戦追悼碑



図72 ベトナムの餓死者の追悼碑



図74 ドイツ・ベルゲンベルゼン収容所跡

くなったといえますし、ドイツ人も五〇〇万人以上が亡くなっています。二回の世界戦争による世界の死者数は一億人近いといえます。

図75は、ポーランドにあるクラクフに残っているユダヤ人の墓です。ドイツ軍はユダヤ人の居住地を破壊し、お墓も破壊しました。そして墓石を道路に敷き詰めたのです。戦後、人々は敷き詰められた墓石を集めて、壁に塗り込めたのです。このような形で歴史を継承しています。

図76はドイツのベルリンにある「つまずきの石」という作品ですが、連行された人の名前とどこで死んだのかが書いてあります。これは路上にあります。踏めば踏むほど、輝くようになっていくのです。このように戦争死者の碑を身近な所に置いて、その歴史を忘れないようにしましょうしています。このような作品からはドイツの歴史の継承への思いが感じられます。



図75 ポーランド・クラクフのユダヤ人墓石



図76 ドイツ・ベルリンの「つまずきの石」

図77は、中国にある七三一部隊の資料館の建物内部のプレートです。ここには、漢民族で二一歳だった蔡さんが一九三八年二月四日に警備隊に捕えられ、一九三九年四月二〇日に特別輸送されたと書いてあります。実験材料として部隊に連れて行かれて、解剖されて殺されたのか、あるいはベスト菌を植えつけられて殺されたのかは分かりません。いずれにしても「特別輸送」によって闇に消されてしまったわけです。その名簿のいくつかが近年発見されていますが、憲兵隊の資料に「特移扱」と書いてあるのです。それは、細菌兵器開発のための実験材料として七三一部隊に送ったということなのです。このようにプレートができ、名前が刻まれたのは、戦後五十年たつてからのことです。遺族調査もはじまっています。

図78は中米コスタリカにある軍事施設の跡です。コスタリカは内戦ののち、軍隊を廃止しました。アメリカ寄りの国ですが、中米で独自外交を進め、中米での内戦の終結に努めました。この軍事施設は現在、国立博物館になっています。人を殺すことにつながるものを平和なものに変えて

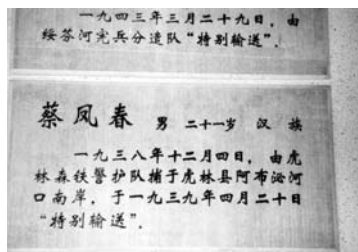


図77 中国・ハルビンの731部隊資料館のプレート

いく人々の歩みは、これからも進んでいくのではないかと思います。

ヨーロッパ連合の形成は平和的統合のはじまりだと思えます。アジアでの平和的な共同もとめられます。この間、アメリカがすすめたグローバルな戦争もおそらく見直されるでしょう。食料や原油を高騰させて投機マネーで儲けていく、規制緩和や民営化によって公共財をも競争の中に入れていく、その結果、地域が空洞化し、貧困が広がるというような経済スタイルも見直されていくでしょう。人々が本当に幸福になるような関係をどうやって作っていけるかが、今後の課題になると思います。

戦争遺跡の意義

今回は浜松や世界の戦争遺跡を見ながら、戦争遺跡から何を学ぶことができるのかについて話してきました。最後に強調しておきたいことは、加害の歴史を踏まえながら、被害の歴史や民衆ひとりひとりの死の重さを見つめるとい



図78 コスタリカ国立博物館

うこと、戦争賛美の言葉の裏にある人々の死や悲しみや怒りを読み込んでいくことです。やはり読みとつていく側が想像力を高めながら、どのようにしたらいい歴史を作っていただけるのかという視点をもつことが大事だと思います。

終わりに、戦争遺跡を考えることの意義を三点にまとめてみます。

一つは、生命や人間の尊厳について考えることであると思います。そこには亡くなった人がいますし、あるいは殺す側に回った人もいます。戦争遺跡は生命への視点を示し、人間の方向性を問うものであると思います。

二つめは、歴史認識や歴史的責任を考えるということです。戦争遺跡は、その戦争の原因や責任を考え、どのように過去を清算してよい社会を作っていくのかという歴史的な責任を問いかけるものと思います。

そして三つめに、それらを踏まえながら、どのように非軍事の平和な社会、アジアの友好や共同性を作っていくのかというテーマを提示するものと考えます。

参考文献

価報告、空襲目標フォルダー、艦載機戦闘報告書ほか（国立国会図書館蔵）

飛行第一二大隊『満州事変記念写真帖』一九三三年

『飛行第六十戦隊小史』飛行第六十戦隊会、一九八〇年

『飛行第一二戦隊（重爆）中国要地爆撃写真集』（防衛省防衛研究所図書館蔵）

『飛行第一二戦隊中国要地爆撃写真帳』（防衛省防衛研究所図書館蔵）

『南西進攻60F参考写真集』（防衛省防衛研究所図書館蔵）

十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房、

二〇〇二年

『浜松の戦争史跡』人権平和・浜松、二〇〇五年

『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』人権平和・浜松、

二〇〇七年

『米国戦略爆撃調査団報告書』艦砲調査隊報告、空襲損害評

〔講師紹介〕

荒川章二（静岡大学情報学部教授）

1952年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。静岡大学教育学部助教授を経て1995年より現職。専門は日本近現代史。主な著書に『軍隊と地域』（青木書店、2001年）、『軍用地と都市・民衆』（山川出版社、2007年）、『日本の歴史 第16巻 豊かさへの渴望』（小学館、2009年）ほか。

村瀬隆彦（静岡県立掛川西高等学校教諭）

1960年浜松市生まれ。國學院大學文学部Ⅱ部史学科卒業。静岡県近代史研究会会員。現在藤枝市史編さん調査委員を兼ねる。専門は軍事・兵事に関連する地域史。おもな著書に『静岡県の戦争遺跡を歩く』（共著・静岡新聞社新書33、2009年）ほか。

竹内康人（近現代史研究者）

1957年浜松市生まれ。静岡県近代史研究会会員。専門はアジア関係史、社会史研究。おもな著書に『浜松の戦争史跡』（人権平和・浜松、2005年）、『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』（人権平和・浜松、2007年）ほか。

静岡大学公開講座ブックレット2

浜松の戦争遺跡を探る

発行日——2009年11月20日

編集・発行——静岡大学生涯学習教育研究センター
〒422-8529 静岡市駿河区大谷836
静岡大学生涯学習教育研究センター
☎054-238-4817 (FAX兼)

印刷——株式会社エスケーピー

